

「美術」 指導の手引き

2016年 第1回試験

「美術」 指導の手引き

2016年 第1回試験

ディプロマプログラム (DP)

「美術」指導の手引き

2014年3月に発行の英文原本 *Visual arts guide* の日本語版
2016年2月発行

本資料の翻訳・刊行にあたり、
文部科学省より多大なご支援をいただいたことに感謝いたします。

注： 本資料に記載されている内容は、英文原本の発行時の情報に基づいています。アップデートされた用語がある場合には、ワークショップなどでは最新の用語にそれぞれ読み替えてご利用ください。

非営利教育財団 国際バカロレア機構
(International Baccalaureate Organization)
15 Route des Morillons, 1218 Le Grand-Saconnex, Geneva, Switzerland

発行所
International Baccalaureate Organization (UK) Ltd
Peterson House, Malthouse Avenue, Cardiff Gate
Cardiff, Wales CF23 8GL, United Kingdom

ウェブサイト : www.ibo.org

© International Baccalaureate Organization 2016

国際バカロレア機構（以下、「IB」という。）は、より良い、より平和な世界の実現を目指して、チャレンジに満ちた4つの質の高い教育プログラムを世界中の学校に提供しています。本資料は、そうしたプログラムを支援することを目的に作成されました。

IBは、資料の中で利用する多様な情報源について、情報の正確さと信憑性を確認します。ウィキペディアのようなコミュニティーベースの知識源を使用する際には、特に留意します。IBは知的財産の原則を尊重し、利用する著作物すべてについて刊行前に著作権者を特定し、許諾を得るよう常に努力します。IBは、本資料で利用した著作物に対して許諾をいただいたことに感謝するとともに、誤記および遺漏がありました場合には、可能な限り早急に訂正いたします。

本資料に関するすべての権利はIBに帰属します。法令またはIB内部規則もしくは方針に明記されていない限り、IBの事前承諾書なしに、本書のいかなる部分も、形式と手段を問わず、複製、検索システムへの保存、送信を禁じます。詳しくは www.ibo.org/copyright をご覧ください。

IBの商品と刊行物は、IBストア (<http://store.ibo.org>) でお求めください。ご注文については、販売・マーケティング部にお問い合わせください。

電子メール : sales@ibo.org

International Baccalaureate、Baccalauréat International および Bachillerato Internacional は、
International Baccalaureate Organization の登録商標です。

IBの使命

IB mission statement

国際バカロレア（IB）は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。

この目的のため、IBは、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。

IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。



IBの学習者像

すべてのIBプログラムは、国際的な視野をもつ人間の育成を目指しています。人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間を育てます。

IBの学習者として、私たちは次の目標に向かって努力します。

探究する人

私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。

知識のある人

私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。

考える人

私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。

コミュニケーションができる人

私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。

信念をもつ人

私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。

心を開く人

私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見だし、その経験を糧に成長しようと努めます。

思いやりのある人

私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。

挑戦する人

私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探究します。挑戦と変化と機知に富んだ方法で快活に取り組みます。

バランスのとれた人

私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。

振り返りができる人

私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

この「IBの学習者像」は、IBワールドスクール（IB認定校）が価値を置く人間性を10の人物像として表しています。こうした人物像は、個人や集団が地域社会や国、そしてグローバルなコミュニティの責任ある一員となることに資すると私たちは信じています。

目次

はじめに	1
本資料の目的	1
ディプロマプログラムとは	2
「美術」の学習	7
ねらい	15
評価目標	16
評価目標の実践	17
美術における「教え方」と「学び方」	18
シラバス	20
シラバスの概要	20
シラバスの内容	25
美術コアシラバス領域と評価課題の関連性	33
評価	36
ディプロマプログラムにおける評価	36
評価の概要 — 標準レベル（SL）	39
評価の概要 — 上級レベル（HL）	41
外部評価	43
内部評価	60
付録	73
指示用語の解説	73

本資料の目的

本資料は、「美術」を学校で計画、指導、評価するための手引きです。「美術」の担当教師を対象としていますが、生徒や保護者に「美術」について説明する際にも、ご活用ください。

本資料は、オンラインカリキュラムセンター（OCC）の教科のページで入手できます。OCC（<http://occ.ibo.org>）は、パスワードで保護されたIBのウェブサイトで、IBの教師をサポートする情報源です。また、本資料はIBストア（<http://store.ibo.org>）で購入することもできます。

その他のリソース

教師用参考資料や科目レポート、内部評価のガイダンス、評価規準の説明といったその他のリソースも、OCCで取り扱っています。過去の試験問題とマークスキームはIBストアで取り扱っています。

OCCでは、他の教師が作成したり、活用している教育リソースについて情報を得ることができますので、ご活用ください。教師たちによりウェブサイトや本、ビデオ、定期刊行物、指導案などの役立つリソースも提供されています。

謝辞

IBは、本資料を作成するにあたり、時間やリソースを惜しみなく提供して下さった教育関係者や提携校の皆様に感謝の意を表します。

2016年 第1回試験

ディプロマプログラムとは

ディプロマプログラム（DP）は16歳から19歳までの大学入学前の生徒を対象とした、綿密に組み立てられた教育プログラムです。幅広い分野を学習する2年間のプログラムで、知識豊かで探究心に富み、思いやりと共感する力のある人間を育成することを目的としています。また、多様な文化の理解と開かれた心の育成に力を入れており、さまざまな視点を尊重し、評価するために必要な態度を育むことを目指しています。

DPのプログラムモデル

DPは、6つの^{グループ}教科が中心となる核（「コア」）を取り囲んだ形のモデル図で示すことができます（図1参照）。DPでは、幅広い学習分野を同時並行して学ぶのが特徴で、生徒は「言語と文学」（グループ1）と「言語の習得」（グループ2）で現代言語を計2言語（または現代言語と古典言語を1言語ずつ）、「個人と社会」（グループ3）から人文または社会科学を1科目、「理科」（グループ4）から1科目、「数学」（グループ5）から1科目、そして「芸術」（グループ6）から1科目を履修します。多岐にわたる分野を学習するため、学習量が多く、大学入学に向けて効果的に準備できるようになっています。生徒は各教科から柔軟に科目を選択できるため、特に興味のある科目や、大学で専攻したいと考えている分野の科目を選ぶことができます。



図1

DPのプログラムモデル

科目の選択

生徒は、6つの教科からそれぞれ1科目を選択します。ただし、「芸術」から1科目選ぶ代わりに、他の教科で2科目選択することもできます。通常3科目（最大4科目）を上級レベル（HL）、その他を標準レベル（SL）で履修します。IBでは、HL科目の学習に240時間、SL科目の学習に150時間を割りあてることを推奨しています。HL科目はSL科目よりも幅広い内容を深く学習します。

いずれのレベルにおいても、さまざまなスキルを身につけますが、特に^{クリティカル}批判的思考と分析に重点を置いています。各科目の修了時に、学校外で実施されるIBによる外部評価で生徒の学力を評価します。また、多くの科目で、科目を担当する教師が評価する課題（コースワーク）を課しています。

プログラムモデルの「コア」

DPで学ぶすべての生徒は、プログラムモデルの「コア」を形づくる次の3つの必修要件を履修します。

「知の理論」（TOK：theory of knowledge）では、^{クリティカルシンキング}批判的思考に取り組みます。具体的な知識について学習するのではなく、知るプロセスを探究するコースです。「知識の本質」について考え、私たちが「知っている」と主張することを、いったいどのようにして知のかを考察します。具体的には、「知識に関する主張」を分析し、知識の構築に関する問いを探究するよう生徒に働きかけていきます。TOKの目的は、共有された「知識の領域」の間のつながりを重視し、それを「個人的な知識」に結びつけることで、生徒が自分なりのものの見方や、他人との違いを自覚できるよう促していくことにあります。

「創造性・活動・奉仕」（CAS：creativity, activity, service）は、DPの中核です。「IBの使命」や「IBの学習者像」の倫理原則に沿って、生徒が自分自身のアイデンティティを構築するのを後押しします。CASでは、DPの期間を通じて、アカデミックな学習と同時並行して多岐にわたる活動を行います。CASは、創造的思考を伴う芸術などの活動に取り組む「創造性」（creativity）、健康的なライフスタイルの実践を促す身体的活動としての「活動」（activity）、学習に有益であり、かつ無報酬で自発的な交流活動を行う「奉仕」（service）の3つの要素で構成されています。CASは、DPを構成する他のどの要素よりも、「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築く」という「IBの使命」に貢献しているといえるかもしれません。

「課題論文」（EE：extended essay）では、生徒は、関心のあるトピックの個人研究に取り組み、研究成果を4000語（日本語の場合は8000字）の論文にまとめます。EEには、世界を対象に学際的な研究を行う「ワールドスタディーズ」として執筆されるものも含まれます。生徒は、履修しているDP科目から1科目（「ワールドスタディーズ」の場合は2科目）を選び、対象とする研究分野を定めます。また、EEを通じて大学で必要とされるリサーチスキルや記述力を身につけます。研究は、正式な書式で構成された論文にまとめ、

選択した科目にふさわしい論理的で一貫した形式で、アイデアや研究結果を伝えます。高いレベルのリサーチスキル、記述力、創造性を育成し、知的発見を促すことを目的としており、担当教員の指導のもと、生徒が、自分自身で選択したトピックに関する研究に自立的に取り組む機会となっています。

「指導の方法」と「学習の方法」

DPでの「指導の方法」(approaches to teaching)と「学習の方法」(approaches to learning)は、熟慮されたストラテジーやスキル、態度として、指導や学習の場に浸透しています。「指導の方法」も「学習の方法」も、「IBの学習者像」に示されている人物像と本質的に関連しています。そして、生徒の学習の質を高めると同時に、DPの最終評価やその先の学びのための礎をつくります。DPでの「指導の方法」と「学習の方法」には、次のようなねらいがあります。

- ・ 学習内容を教えるだけでなく、学習者を導く存在としての教師のあり方を支援する。
- ・ 生徒の有意義で体系的な探究と、批判的思考や創造的思考を促すため、教師がファシリテーターとしてより効果的なストラテジーを立てられるよう支援する。
- ・ 各教科のねらい(科目別に掲げる目標以上のもの)と、それぞれの知識の関連づけ(同時並行的な学習)の両方を推進する。
- ・ 生徒が卒業後も積極的に学び続けるために、さまざまなスキルを系統的に身につけるよう奨励する。また生徒が良い成績を得て大学に進学できるよう支援すると同時に、大学在学中の学業の成就や卒業後の成功に向けて準備する。
- ・ DPでの生徒の体験の一貫性と関連性をよりいっそう高める。
- ・ 理想主義と実用主義が融合したDPの教育ならではの本質に対して、学校の理解を促進する。

5つの「学習の方法」(思考スキル、社会性スキル、コミュニケーションスキル、自己管理スキル、リサーチスキルの各スキルを高める)と、6つの「指導の方法」(探究を基盤とした指導、概念に重点を置く指導、文脈化された指導、協働に基づく指導、生徒の多様性に^{ダイファレンシエーション}応じて差別化した指導、評価を取り入れた指導)には、IBの教育を支える重要な価値観と原則が含まれています。

「IBの使命」と「IBの学習者像」

DPでは、「IBの使命」と「IBの学習者像」に示された目的の達成に向かって、生徒たちが必要な知識やスキル、態度を身につけられるよう働きかけます。DPにおける「指導」と「学習」は、IBの教育理念を日々の実践において具現化したものです。

学問的誠実性

DPにおける「学問的誠実性」(academic honesty)は、「IBの学習者像」の人物像を通じて示されている価値観と振る舞いに則しています。学問的誠実性は、指導、学習、そして評価において、各自が誠実で公正であることを促し、他人とその成果物の権利を尊重することを奨励します。また、すべての生徒は学習を通じて身につけた知識や能力を示す機会を等しく得ることが保証されています。

評価のための課題(コースワーク)を含むすべての学習成果物は生徒本人が取り組んだものでなければなりません。学習成果物は生徒自身の独自のアイデアに基づくものであり、他人のアイデアや成果物を用いる場合は出典を明示しなければなりません。教師が課題について生徒に指導する場合や、生徒同士の協働作業を要する評価課題に取り組む際には、必ず、IBが定めるその教科のためのガイドラインを順守しなければなりません。

IBおよびDPにおける学問的誠実性について、より詳しくはIB資料『学問的誠実性』、『DP:原則から実践へ』、および『一般規則:ディプロマプログラム』を参照してください。DP科目の学校外で実施されるIBによる外部評価(external assessment)と学校内の教師が評価を手がける内部評価(internal assessment)に関連する学問的誠実性の情報は、本資料の中にも記載されています。

出典を明らかにする

国際バカロレア^{ディプロマ}資格(IB資格)取得志願者は、IBに提出する評価課題で引用した情報の出典をすべて明らかにしなければなりません。コーディネーターと教師は、このことに留意する必要があります。以下にこの要件について説明します。

IB資格取得志願者は、さまざまな媒体を用いた評価課題をIBに提出します。その中には、出版物または電子情報として公表された視聴覚資料、文章、図表、画像、データなどの引用が含まれている場合があります。志願者は、他人の成果物やアイデアを用いる場合、参考文献目録の書式として標準的とされる一定の書式に従い、出典を明示しなければなりません。志願者が出典の明示を怠った場合、IBは規則違反の可能性があると調査を行います。場合によっては、IB最終資格授与委員会(IBM final award committee)による処分の対象となります。

IBは志願者が用いる参考文献目録や本文中の引用の書式については指定せず、志願者の学校の担当者または教師に判断を委ねています。幅広い科目を提供していることや、英語、フランス語、スペイン語の3言語に対応していること、そして多様な参考文献目録の書式があることから、特定の書式を要求することは非合理的かつ制限的です。実際には、ある特定の書式が最も頻繁に使われるかもしれませんが、学校はその科目と使用言語に適した書式を自由に選ぶことができます。その科目のために学校が選ぶ参考文献目録の書式にかかわらず、著者名、発行日、書名、ページ番号などの最低限の情報は明記する必要があります。

志願者は標準的とされる書式を用い、言い換えや要約を含むすべての参考資料の出典を一貫した書式で明示することが求められます。文章執筆の際、生徒は引用符（または、字下げなどのその他の方法）を用いて自分自身の言葉と他人の言葉を明確に区別し、適切な形で引用を示して参考文献目録に明記してください。電子情報を引用した場合、参考文献目録にアクセス日を明記してください。志願者に期待されているのは、参考文献目録の作成の完璧さではありません。すべての出典を明らかに示すことが求められているのです。志願者は、自分自身のものではない出版物や電子情報として公表された視聴覚資料、文章、図表、画像、データなどもすべて出典を明らかにするように必ず指導を受けなければなりません。この場合も参照・引用の適切な書式を用いてください。

学習の多様性と学習支援の必要な生徒への取り組み

I B資格取得志願者で学習支援を必要とする生徒に対して、学校は平等に評価を受けるための配慮と妥当な調整を行わなければなりません。配慮や調整は、I B資料『受験上の配慮の必要な志願者について』および同（英語版）『*Learning diversity in the International Baccalaureate programmes: Special educational needs within the IB programmes*（I B教育と学習の多様性：I Bプログラムにおける特別な教育的ニーズ）』に沿って行わなければなりません。

「美術」の学習

美術

美術は日常生活における欠かせない分野であり、人間の創造性、表現、伝達および理解のあらゆるレベルに浸透しています。美術の範囲は大小の共同体、社会および文化に組み込まれた伝統的な形式から、新たに登場しつつある現代の多様で独創的な視覚言語の形式にまで及んでいます。美術は儀式的、精神的、装飾的および機能的な性質の他に、社会政治的な影響をもつことがあり、場合によって人を引きつけたり反体制的であったり、啓蒙的であったり、また心の励みになることもあります。美術のすばらしさは、自身でイメージやオブジェを制作するだけでなく、世界中の人々によって制作される芸術作品の価値を認め、それを享受し、尊重し、鑑賞することにもあります。美術における理論と実践は、動的で、絶え間なく変化し続けるものであり、個人や協働作業による探究、創造的な作品制作および批判的に解釈することを通して、多くの知識の領域と人類の経験を結びつけます。

ディプロマプログラムの美術コースは、生徒が自らの創造的かつ文化的な可能性と限界に挑戦することを奨励します。これは思考を刺激するコースで、生徒は技法の習熟を目指し芸術作品の制作者としての自信をつけると同時に、問題解決と独創的思考における分析的なスキルを育みます。生徒は異なる観点と異なる文脈で美術を探究し比較することに加え、同時代の芸術活動および表現手段と幅広く関わり、体験し、また批判的に振り返ることが求められます。本コースは、大学などで継続して美術を習得しようとする生徒、および美術を通じた生涯学習を求める生徒を対象としています。

本コースは、「IBの使命」および「IBの学習者像」に即し、ローカルな地域、地方、国、世界のなかのあらゆる場所で、また多様な文化の境界を越えて、生徒が自由に、積極的に美術を探究することを奨励します。美術コースの生徒は探究、調査、振り返り、および創作活動を通じて、自身を取り囲む世界の表現および美学の多様性に対する理解を深め、批判的な知識をもった視覚文化の作り手、そして受け手となります。

「標準レベル」と「上級レベル」の違い

美術シラバスでは、標準レベル（SL）と上級レベル（HL）のコースの明確な相違を示し、また指導と学習において幅と深さのあるHLでの追加の評価要件について説明します。HLの生徒には、評価課題で自身の作品が他の芸術家に触れてどのような影響を受けたかを振り返り、また新たに芸術制作の表現手段や技法、形式を用いてより掘り下げた

実験を行うことが求められています。また、HLの生徒にはより多くの作品を制作し、それが想定される鑑賞者にどのように伝わるかについて深い考察を示すことも奨励されています。

美術とディプロマプログラムのコア

美術と「課題論文」(EE)

美術の「課題論文」(EE)を書くことは、生徒が特に興味のある対象について自由に研究を行う機会となります。生徒には、美術に即した^{リサーチ・クエスチョン}研究課題を展開し探究するため、さまざまなスキルを独創的かつ批判的に用い、そして特定の美術分野に及ぼす影響を考慮したうえで調査を行い、試し、確認することが奨励されます。

研究結果は、特定の問題または研究課題に効果的に取り組んだもので、美術の分野（建築、デザイン、現代におけるさまざまな視覚文化の形式を含むものとして広く定義される）に即した体系的で筋の通った記述（適切なビジュアルを含む）でなければなりません。研究は、生徒が直接体験した芸術作品や人工製品やデザインから、あるいは特定の芸術家や様式や時代の作品に対する興味から生じたものや着想を得たものでもかまいません。これは生徒自身の母国の文化または他の文化に関連しているものも可能です。芸術家やキュレーターなどに直接会うことはローカルな（あるいはローカルではなくても）直接的な調査として有効で大いに奨励されます。

美術の課題論文として適した表題例を次に示します。

- ・ ワシリー・カンディンスキーによる色の使用についての批判的評価
- ・ ヘンリー・ムーア（1898年生まれ）の作品において明らかにアフリカの影響が見られる範囲の分析
- ・ シャオ・ルーの作品を通して分析した“アパートメント・アート”という用語の分析

美術の課題論文の詳細については、IB資料『「課題論文」(EE)指導の手引き』を参照してください。

美術と「創造性・活動・奉仕」(CAS)

「美術」は、「創造性・活動・奉仕」(CAS)の活動に効果的につなげやすい科目です。本科目の実践的で体験的な特性はさまざまなCASの活動と効果的に結びつき、厳しい勉強に日々打ち込むディプロマプログラムの生徒の毎日にちょうど良く寄り添い、バランスを取る要素となるでしょう。CASの活動のやりがいや楽しさは、美術コースの生徒に大きな影響を与えることも少なくありません。CASの活動の例を次に示します。

- ・ 学校内でのアートプロジェクト、発行物や宣伝資料のデザイン、作品発表イベントでの発表などの色々な創造的活動に参加。学校を拠点とし、さまざまな受け手とかかわるような芸術活動やイベントの計画立案、制作、発表に参加することで、生徒は創造的思考を伸ばすことができる。

- ・ 学校外の他の人々と協力して一連の芸術活動やワークショップや展覧会に参加。たとえば、地元の地域社会の団体と一緒にプロジェクトを立案したり、特定のニーズをもつ特定の受け手に向けて地域の他の学校と共同で作品を制作したりする。

ただし、CASはその生徒のいかなる科目のいかなるコース要件とも区別されなければならず、他の科目の一部としたり、他の科目の中で活用したりできない点に注意してください。

教師用参考資料

美術コースとCAS間をつなぐこれ以外の機会については、IB資料『「美術」教師用参考資料』を参照してください。



美術と「知の理論」(TOK)

「知の理論」(TOK)のコースでは、生徒は知識の本質について、私たちが「知っている」と主張することをどのようにして知るのかを考察することが求められます。本コースは、理論、感情、言語、知覚、直感、想像、信仰および記憶という8通りの「知るための方法」を設定しています。生徒は、自然科学、社会科学、芸術、倫理、歴史、数学、宗教的知識の体系、土地固有の知識の体系といった種々の「知識の領域」において、人間がこれらの知識を生み出す方法について探究します。また本コースでは、種々の学問領域において知識がどのようにもたらされるのか、各学問領域の共通点と相違点は何かを考慮することで、異なる「知識の領域」間の比較を行うことが生徒に求められています。

「芸術」の教科の生徒は、さまざまな文化的文脈の知識やスキル、考え方を通じて、種々の芸術のあり方が発展し伝えられる方法について学びます。これらの学習によって、生徒は人間の有り様の複雑性を研究し、考察することができます。生徒は一連の素材や技術を探究することで、芸術の技法、創造性、表現、さらにコミュニケーションの側面の理解を深めることを目指さなければなりません。

「芸術」の生徒にはさまざまな観点から芸術に関する知識を分析する機会が与えられます。そして彼らはこの知識を体験的な方法やより伝統的な学問的方法により習得します。芸術の本質は、全体としての「知識の領域」の探究と、特にさまざまな芸術形式についての知識の探究が結びついて、私たち自身や私たちの行動様式、私たち人間が相互にもつ関係、あるいは私たちとより広い周辺世界との関係を理解する際の助けになる点にあります。

「芸術」で行われるTOKでは、学際的なつながりを明らかにし、生徒が個人の観点や文化的な観点の長所とその限界を探究できるようにしていきます。芸術を学ぶには、生徒は自身の知識の根拠を振り返り、それを疑ってかかる必要があります。また芸術の立場から他のディプロマプログラム科目を探究することで知識の相互依存的特性を理解することができます。これにより、生徒は「人がもつ違いを違いとして理解し、自身と異なる考えの

人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続ける」（IBの使命）ことが奨励されます。

美術の生徒が考察する可能性のあるTOKに関連した問いの例を次に示します。

- ・ 芸術に関する（さまざまな）知識とは、芸術という表現手段以外では表現が不可能なものなのか。それはどの程度そうなのか。
- ・ 芸術で採用される「知るための方法」は他の「知識の領域」とは根本的に異なるものなのか。
- ・ 美術において、想像力はどの程度特別な役割を果たしているのか。
- ・ 芸術家にはどのような道徳的責任があるのか。
- ・ 個人の主観的観点はどのように芸術の知識に貢献するのか。
- ・ 私たちが芸術作品を判断する基準はどのようなものか。
- ・ 知識の探究において、私たちが作品よりも制作過程により大きな関心をもつことがあるのはなぜか。
- ・ 芸術には社会的機能があるのか。
- ・ 芸術と数学と倫理学では、真実はどの程度まで異なるのか。

美術と国際的な視野

国際的な視野とは、世界とそこに住む人々に対する開かれた態度と好奇心を表します。これはまず、生徒が他者と効果的につながるために自身を理解することから始まります。芸術は、生徒にとって自身を取り囲む活発な文化の影響を認識する絶好の機会となります。ディプロマプログラムの美術コースは、生徒に多岐にわたる美術の分野と形式を学習する機会を提供します。生徒には、さまざまな文脈から芸術を探究し芸術に取り組むことが求められます。種々の芸術形式で制作し、調査し、批判的に分析し、またその価値を認めることで、美術への理解を深めるだけでなく、グローバルな共同体における美術の知識、理解および経験も深めます。生徒はより知識豊かで思慮深くなり、優れた専門家やコミュニケーションがうまくできる人間、また視覚的に考えられる人間になるための能力を磨きます。生徒は、あらゆる芸術形式および芸術文化に見られる側面を正しく認識することを学び、またそれぞれの文化が自らの価値観やアイデンティティを視覚的に表現する際の固有の方法を認めることを学びます。

文化

本資料の目的上、「文化」は習得され共有される信念、価値観、興味、考え方、生産物、そして社会によって作り出された生産物とあらゆるパターンの振る舞いとして定義されます。この見方では、体系立った記号システム、思考、説明および信念、そして人間が日常生活の中で作り出し加工する物質的な生産も文化として扱います。文化は動的かつ有機的で、グローバルな文脈における多数のレベル（国際的、国内的、地方、ローカルな地域、また社会における種々の社会集団のレベル）に影響を及ぼしています。文化は流体であり変化するものとみなされます。

文化は、人間が周囲の環境に対しての思考や感情、行動を整理するための全体の枠組みを提供するものとして見ることができます。そしてこの枠組みにおいて、「文化的文脈」とは、美術コースの学習用シラバスと評価課題の両方にはっきりと見られるように、文化に影響を与え、また文化から影響を受ける条件を指しています。これには歴史的、地理的、政治的、社会的および技術的要因も含まれます。

慎重な取り扱いを要するトピックへの取り組み

生徒は美術を学習することにより、面白く刺激的で、個人としての自分にとって大切なトピックや問題に取り組む機会を与えられます。ただしそのようなトピックや問題は、多くの場合、生徒によっては過敏になってしまったり、個人的に難しい話題であることがあります。教師はこのことに留意し、このようなトピックに対してどうアプローチし取り組むべきか責任ある態度で指導するようにしてください。また他者の個人的、政治的および精神的価値観（特に人種、性別または宗教的信条に関連するもの）への配慮も必要です。

学校全体にかかわる配慮の一部として、美術の生徒がコースの期間中に倫理的なものの見方を保持できるよう必ず支援してください。学校は、生徒が着手している作業が環境を破壊したり、過度な暴力や不当な暴力を含んだり、露骨な性描写を扱うことがないよう、徹底してください。

事前の学習

美術コースはSLとHLのいずれも事前に学習しておくべきトピックはありません。本コースは生徒が美術を個人レベルで経験できるように設計されています。そのため本科目は、生徒が獲得した知識をどのように示したかに加え、生徒が培った美術を学ぶうえで必要となるスキルや姿勢も成績に反映されます。美術コースの理論的で実践的な内容を通じて、生徒個人の創造的で想像力に富む才能や、芸術の形式を使ってコミュニケーションを図る能力を高め伸ばします。

美術コースでは多様な生徒に対して適切な学習機会を提供するため、その後の美術、舞台芸術および他の関連科目におけるさらなる学習の基礎を適切に習得することができます。また、訓練を経験したり、創造的なコミュニケーションの方法や協働作業を行う際の

スキルを向上させることができるので、芸術とは関係のない分野の仕事に就いたり、芸術以外の専攻で大学に進んだりする生徒にとっても有益なコースとなります。

中等教育プログラム（MYP）との接続

美術コースでは事前に正式に学習しておくべきトピックはありませんが、IBの中等教育プログラム（MYP）「芸術」の科目領域は、有益な基礎を提供するので、生徒の役に立つはずで

す。MYPは11歳～16歳の生徒を対象としており、これは生徒に創造的、批判的、内省的な考えをするように促す学習の枠組みとなっています。MYPは積極的に知力を高めることに力点を置いており、生徒に従来科目の学習と現実世界を結びつけるよう促します。これにより、グローバル・リーダーとなるべき若い人々に不可欠な素質であるコミュニケーション、多様な文化の理解およびグローバルな取り組みのためのスキルを伸ばすことができます。

MYP「芸術」の科目領域では、芸術分野においてきわめて重要な概念理解を通して芸術について学ぶだけでなく、芸術家として成長する機会も与えられます。学習は、個人、ローカルな地域の範囲、国内外のいずれで起きた場合にも、あるいはグローバル的に重要な課題についてであっても、その生徒自身に関連した文脈で行われます。MYP全体を通して、芸術を学ぶ生徒は知識を活用し、スキルを磨き、創造的思考を行い、また種々の芸術作品を鑑賞する必要があります。MYP「芸術」の科目領域、特にMYPの美術分野は、ディプロマプログラム美術コースのための強固な基盤となります。

MYP「芸術」では、生徒には以下のようなディプロマプログラム美術コースのための準備をする機会があります。

- ・ 文脈に沿った美術の役割を理解し、それを踏まえたうえで自身の作品と自身の芸術的判断に役立てる
- ・ 美術における美的感性を発見し、それをさまざまな形式で分析、表現する
- ・ 美術作品を制作し、それについてコミュニケーションする過程でスキルを習得し、発展させ、応用する
- ・ 異なる角度から考え、好奇心を育み、あえて意図的に限界を追求し、それに挑戦する
- ・ 生徒自身の世界、自身の芸術とその受け手、および他者の美術に向き合う

MYPでは、生徒は芸術について学ぶだけでなく、自身が芸術家として成長するための機会が与えられます。IB資料（英語版）『*MYP Arts guide*（MYP「芸術」ガイド）』は自主的な実験と理解を促し、これは以降のディプロマプログラムでも重んじられ、深められます。生徒は創造的に思考することにより、探究と問題解決を通して美術の学習を達成できます。創作過程に重点を置くことで、生徒は美術についてコミュニケーションする過程について計画立案し、制作し、発表し、振り返りをし、評価することが可能になります。生徒はその後、感情や体験、アイデアに向き合い、それを表現するため、さらに自身の能力の範囲を広げます。そこではPYPで培ったスキルがいかされます。

美術と学問的誠実性

学問的誠実性

学問的誠実性の問題に関して生徒に指導する重要な機会については、本資料で後述される各評価課題で取り上げています。



芸術全体での評価の構成要素は、口頭発表から正式な文章での発表まで、また完成作品の発表から創造の過程にインスピレーションを受けた刺激やアイデアを集めたものまで多岐にわたります。学問的誠実性を維持するための指針は、ディプロマプログラムのすべての科目および評価の構成要素に適用されます。ただし芸術における課題の多様性や豊かさのために、美術では各要素それぞれで学問的誠実性を維持するのが難しくなることがあります。詳細については、学問的誠実性に関する I B 資料を参照してください。

資料の参照

I B 資格取得志願者が、インターネットを含む何らかの資料の内容を活用した場合、学校の学問的誠実性の方針にしたがい必ずその出典を明示しなければなりません。出典は、生徒の作品のどの部分が他の資料から引用され、またどこに作品の由来があるかを明確に特定できる方法で記録する必要があります。他者の作品やアイデア、イメージから自身の作品に影響を受けたことを生徒が認識しており、それが作品において直接的に言及されていない場合は、作品に参考文献目録として出典を入れておく必要があります。これは創造の過程がさまざまな刺激や影響やひらめきの源によってもたらされる芸術の分野では特に重要です。

形式的な要件の準拠

芸術における評価課題のほとんどは授業内で完了します。そのため厳しい条件の下で生徒は作品を完了、発表し、内部評価向けの作品の場合は評価されなければなりません。試験官およびモデレーターが受けとる作品は首尾一貫しており、採点規準に照らして評価可能である必要があります。そのため形式的な要件を守らなければなりません。これら条件や形式的な要件は、各志願者が達成度を実証するための等しい機会が与えられることを保証するために設計されています。したがって、これらの要件にしたがわない場合は当該志願者に正当でない利益をもたらす可能性があるとして、学問的不正行為とみなされます。

作品発表用の作品の提出

美術コースにおける最終評価のために選ばれたどの作品も、当該生徒によって制作されたものでなければなりません。たとえば、生徒のファッションに関する学習の一部としてデザインされた衣服または装身具は、生徒自身が制作した場合を除き、評価のために実物で提出することはできません。ある雰囲気を生み出す、または受け手に特定の体験をさせるために使用される追加要素の使用についても、同じ原則が適用されなければなりません。（ただし、音響要素についてはいかなるものでもこの美術コースでは評価の対象になりません。）生徒がたとえば、音楽や音響効果を使用する場合、それらは適切な引用元を示した著作権フリーのものであるか、生徒自身が制作したものでなければなりません。生徒自身が作品を形にしていなくても、作品発表の評価のためにそのデザインを作品として提出することは可能です。ただし実物化された作品をそこに入れることはできません。生徒が既製品や、すでに見出された対象を取り上げ、それを利用して新しい作品を制作した場合、できあがった作品は生徒が制作した作品であるとみなされます。

生徒が評価のための作品を提出する際、選んだ作品にそれぞれキャプションを入れる必要があります。キャプションには、作品タイトル、表現技法、サイズおよび制作意図を簡単に述べます。生徒はオブジェが自身で制作したものか、見つけてきたものか、または購入したものかを、キャプションの編集時に「表現技法」セクションに明記しなければなりません。

「芸術」のねらい

「芸術」科目のねらいは、生徒が次のようになることです。

1. 生涯にわたって芸術とのかかわりを楽しむ
2. 芸術の知識と振り返りの習慣をもつ批判的な立場から芸術と関わる人となる
3. 芸術の動的で変化し続ける特性を理解する
4. 時間、場所および文化を超えた芸術の多様性を探究し、その価値を認める
5. 自信をもつ的確に考えを表現する
6. 認識および分析のためのスキルを培う

美術のねらい

さらに、SLおよびHLの美術コースのねらいは生徒が次のようになることです。

7. 個人および文化の文脈の影響を受けた作品を制作する
8. 視覚文化と表現手段についての知識をもった批判的な鑑賞者および制作者となる
9. 作品概念やアイデアを伝えるためのスキル、技法およびプロセスを培う

評価目標

S LまたはH Lの美術コースを修了した生徒には、次のことが期待されます。

評価目標 1：特定の学習内容の知識と理解

- a. 美術が制作され発表される種々の文脈を特定する
- b. 異なる文脈から作品を説明し、制作者が採用した考え、表現手法および技術を識別する
- c. 芸術に関係するスキル、技法、表現手段、形式およびプロセスを認識する
- d. 適切な芸術の言語を用いて、制作意図に即した作品を発表する

評価目標 2：知識と理解の応用と分析

- a. ビジュアル・コミュニケーションを通して、作品概念やアイデアや意味を表現する
- b. さまざまな文脈から芸術作品を分析する
- c. 作品制作に関連する技能、技法、表現手段、形式およびプロセスについての知識と理解を応用する

評価目標 3：総合し分析、判断する力

- a. 生徒自身および他者により制作された芸術作品を批判的に分析、議論し、また知識に基づいた感想を明確に述べる
- b. 自身の制作意図で、どのように意味が受け手に伝えられるかを考慮した作品の計画立案、進行と制作について説明する
- c. 作業を進めるために成功と失敗を取り上げて批判的クリティカル振り返りリフレクションを行っていることを示す
- d. 作品制作がなぜ、どのように展開したかを分析、判断し、生徒自身が視覚表現において行った選択の根拠を示す

評価目標 4：適切な技能や技法の選択、活用、および応用

- a. 作品制作において異なる表現手段、素材および技法を用いて実験する
- b. 作品制作において適切なイメージ、表現手段および素材を選択する
- c. 技能、技法、表現手段、イメージ、形式および制作過程を活用し応用する際の技法的な習熟を示す
- d. 制作意図に即して完成作や習作を多数制作する

評価目標の実践

以下の表は、評価目標が美術の学習シラバスと評価課題のどの部分で直接的に取り扱われているかを示しています。

		評価目標 1				評価目標 2			評価目標 3				評価目標 4			
		a	b	c	d	a	b	c	a	b	c	d	a	b	c	d
コア シラバス	文脈に沿った美術	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●		
	美術の方法			●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
	美術の コミュニケーション	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●
評価 課題	パート1 (SLおよびHL)	●	●	●	●		●	●	●		HL のみ					
	パート2 (SLおよびHL)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	パート3 (SLおよびHL)				●	●			●	●	●	●	●	●	●	●

美術における「教え方」と「学び方」

美術における指導の方法

ディプロマプログラムの美術コースは、美術の動的な特性を反映するように設計されています。美術カリキュラムを設計し実施する際、本資料の作品制作形式の表で示した要件（「作品制作の形式」のセクションを参照）を満たすのに、どの芸術家や芸術的表現手段、形式、研究を取り上げるかは教師の自由な選択に任されている点に注意してください。

本資料ではコア（中核）のシラバスを細かく分けて規定していますが、教師には全体的な観点から美術コースを教えることが奨励されています。また本資料では、刺激的で魅力的な多様なアプローチを促す意図から、学習活動もいくつか提案しています。これらは活動を規定したり制限したりするためのものではなく、生徒が評価課題の要求に沿って十分に準備できるよう多くの方法の一部を示したものです。教師には、それぞれの地域の環境および個々の学校の状況にしたがって、この包括的なシラバスを創造的に解釈することが奨励されています。これは国際的な美術コースであり、教師がどのように多様な文化的文脈から探究する芸術と芸術家を選ぶかは、教師の自由裁量に任されています。教師は、自身が精通している慣習のみを教えるのではなく、自身がよく知らない世界各地の伝統にも生徒に触れさせるリスクを厭わないようにしてください。

美術の教師は、あらゆる知識の源、情報の提供者または専門家であることを期待されているわけではありません。教師の役割は、生徒の学習経験を積極的かつ注意深く構成することで、生徒の潜在力を引き出し、コース要件を満たす方向に学習を導くことにあります。生徒は知識とスキルを身につけた自立した芸術家となるための力をつけなければなりません。芸術作品の制作活動は常にコースのさまざまな部分に組み込まれていることを前提としているため、シラバスの個別分野について時間の配当は決められていません。ただし限られた時間と資源を有効活用するためにも、クラス活動や、可能であれば展覧会の見学や専門家と共に行うワークショップを念入りに計画することは必要です。

本コースはこのコース単体で機能するよう設計されていますが、学校によっては、外部の人間を招き、なんらかの表現手段の技能を教えてもらうカリキュラム外の活動を取り入れたり、実物をモデルにした写実デッサンのような長期にわたる実施が望ましい活動を取り入れたりすることもできます。

教師用参考資料

本コースの実施を支える主要な資料については、I B資料『「美術」教師用参考資料』を参照してください。



美術における学習の方法

美術コースは生徒を中心とし、生徒による探究を包括的^{ホリスティック}で全人的な学習経験の中心に位置づけています。生徒自身が興味をもち刺激を受けるような学習となるよう、生徒は芸術家、芸術作品、文化的文脈、および表現手段と形式を自由に特定して選び、探究することができます。また生徒には発表や実演、作品発表といったさまざまな創造的方法で学習成果を示す自由が認められています。

美術の学習は行動に依存するため、本コースは実践的な体験を必要とします。コミュニケーションは美術にとって不可欠です。生徒は作品についてコミュニケーションを図る過程だけでなく、その成果と難しさについても体験し、振り返りを行わなければなりません。分析や推論といった高次の思考スキルの他に、計画性、自己管理および自主研究のスキルも大切です。生徒はまた、自身の調査には何が関連し有用であるかの判断や、アイデアを行動に転換させながらどのように知識と理解を実践に移すかの判断について学ばなければなりません。

本コースを通じて、生徒は多様な文化的文脈から美術を学ぶだけでなく、理論や研究についての知識を得て、自身の作品および思考が世界に及ぼす影響を意識しながら、実際の制作を誠実に行うことの重要性について学ぶ必要があります。

美術コースの生徒には、従来の学問的方法だけでなく、実験や自身にとって重要な体験に基づいて理解に到達するなどして、研究を進めることが奨励されます。美術には多数の方法による教え方と学び方（A T L）のスキル（社会、研究、思考、コミュニケーションおよび自己管理）があり、教師と生徒が意義のある学習経験を円滑に行えるようになっています。たとえば美術ジャーナルは美術コースの中心的要素と考えられています。美術ジャーナルでは振り返りのプロセスを通して多数のA T Lスキルを結合させます。これがコース全体での学習活動の特色となります。

シラバスの概要

コア領域

S LとH Lの美術コアシラバスは、図2に示す相互に関連する3つの同等の領域で構成されます。

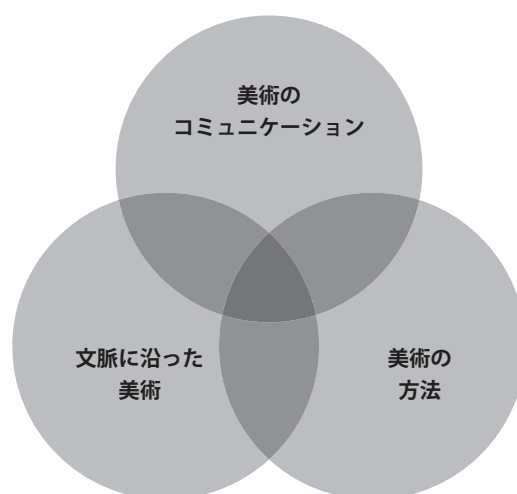


図2

これらのコア領域は、評価課題と完全に連結されるように設計されているので、教師が設計し実施する学習コースの計画の中心とならなければなりません。生徒は、これらの領域間の関係性を理解し、また各領域からどのような情報が得られ、自身の作品にどのように影響するかを理解する必要があります。

文脈に沿った美術

シラバスの「文脈に沿った美術」はレンズのような役割を果たし、美術の実践に役立ち影響を与えるような観点や理論、文化を探究するよう生徒に促します。生徒は、さまざまな文脈や伝統について研究し、理解し、正しく認識できるようになる必要があります。またそれら相互間の関連性も特定できなければなりません。

生徒は「文脈に沿った美術」を通して次のようになります。

- ・ 美術のより広い世界について知り、自身の作品が制作された文化的文脈を理解し、正しく認識する
- ・ 自身が研究する芸術作品の表現手法および技術をよく見て批判的に考え、技法の実験をし、自身の芸術作品を制作する中で活用できそうなものを特定する
- ・ 多様な文化的文脈の作品を調査し、自身が見て体験した作品に対して、より確かな知識に基づいた洗練された鑑賞眼を養う

美術の方法

シラバスの「美術の方法」では、技能、技法およびプロセスの探究と習得により、そして各種の表現手段や方法に取り組むことにより、芸術作品を制作する方法を扱います。

生徒は「美術の方法」を通して次のようになります。

- ・ 多様な表現手段、プロセス、技法および技能が美術作品の制作に必要なこと、またこれらがなぜ、どのようにして発達してきたかを理解し正しく認識する
- ・ さまざまな芸術作品の制作方法の複雑さを理解するため他者の作品について研究し、そこからインスピレーションを得て自身の実験や作品の制作を行う
- ・ 異なる受け手に対して一連の作品はどのように意味や目的を伝えることができるのか理解する

美術のコミュニケーション

シラバスの「美術のコミュニケーション」では、生徒は展覧会や公共の場での作品発表のために作品を選ぶ過程について調べ、理解し、実行に移します。これは自身の作品を選ぶときの判断にかかわってきます。

生徒は「美術のコミュニケーション」を通して、次のようになります。

- ・ 美術のコミュニケーションには多くの方法があることを理解する。また見せ方が意味を構築し、個々の作品に対する評価や理解のされ方にも影響を与える場合があることを正しく認識する
- ・ 振り返りと評価の過程を通して多数の作品を制作し、作品発表用の作品を選択する。このとき選択の背後にある論拠を明確に述べ、選択された作品がどのように結びついているのかを特定する
- ・ キュレーターの役割の探究。展示の概念は広範囲にわたり、多くの不確定要素を含むが、とりわけ受け手に対する潜在的な影響が大きいことを確認する

コースのマッピング

生徒は以下の実践の探究を通して、コアシラバスの領域を研究する必要があります。

- ・ 理論的実践
- ・ 作品制作の実践
- ・ キュレーションの実践

この表は、これらの活動がSLおよびHL双方のコアシラバス領域とどのように関連しているかを示しています。

	文脈に沿った美術	美術の方法	美術のコミュニケーション
理論的実践	生徒は芸術家の作品を異なる文化的文脈から考察し、比較します。 生徒は自身および他者の作品に影響を与えている文脈について検討します。	生徒は作品制作のためにさまざまな技法に目を向けます。 生徒は異なる技法がなぜ、どのように発達してきたか、またその発展の過程を調査し、比較します。	生徒は、視覚的および記述的手段を通じたコミュニケーションの方法を探究します。 生徒は知識と理解を最も効果的に伝える方法について芸術的選択を行います。
作品制作の実践	研究と批判的思考、技法の実験の過程を通して、生徒は作品を制作します。 生徒は特定の技法を自身が進める作品に応用します。	生徒は多様な表現手段を用いて実験を行い、作品を制作するための技法を探究します。 生徒は技能、技法および表現手段によって特徴づけられる制作過程を通して作品概念を発展させます。	生徒は振り返りと評価の過程を通して多数の作品を制作し、技能と表現手段と作品概念を総合して示します。
キュレーションの実践	生徒が見て体験した作品や展示に対する知識に基づいた鑑賞眼を養います。 生徒は作品を制作し作品発表する際に自身の意図を説明できるようになります。	生徒は自身の進行中の作品がどのように意味や目的を伝えるかを評価します。 生徒は「展覧会」の本質について考察し、選択の過程と自身の作品が異なる受け手に与える潜在的な影響について考えます。	生徒は作品発表用に完成作品を選択し発表します。 生徒は複数の作品が互いにどのようにつながっているかを説明します。 生徒は芸術的判断が発表全体にどのように影響するかについて議論します。

生徒が評価課題の要求に完全に応えられるように準備するためにも、計画が必ず上述した各シラバスの活動を扱うよう教師は徹底してください（どのような内容を扱うか、何に重点を置くかは生徒の自由裁量に任されています）。シラバス領域と評価課題の間の関連性については、「美術コアシラバス領域と評価課題の関連性」のセクションを参照してください。

美術ジャーナル

美術コースの期間中、SLとHLの生徒は美術ジャーナルを継続することが求められています。これは2年間にわたる生徒による記録で、以下の事項の記録に活用します。

- ・ 作品制作の技能および技法の進歩
- ・ 表現手段および技術を用いた実験
- ・ 個人的振り返り
- ・ 直接観察したときの感想
- ・ 探究および発展のための創造的なアイデア
- ・ 芸術の実践および作品制作の経験に対する自身の分析、判断
- ・ 多様な刺激や芸術家とその作品に対する自身の感想
- ・ 詳細な分析、判断および批判的分析
- ・ 受けとった貴重なフィードバックの記録
- ・ 生徒が直面した難題と達成したこと

生徒には自身の進歩を記録する最適な方法を見つけ、美術ジャーナルの形式を自由に決めることが奨励されています。美術ジャーナルの目的は、技能とアイデアの習得を支援、育成し、発達を記録し、また課題と成果を批評することにあります。コース終了時に評価のために文章で提出される課題の大部分は、美術ジャーナルの内容から取り上げ、発展させたものであることが望ましいでしょう。

ジャーナルの各項を評価に合わせて選択し、適正化して提示しますが、ジャーナル自体は直接評価やモデレーションの対象にはなりません。ただし、ジャーナルは本コースの根拠をなす活動とみなされます。

評価課題における美術ジャーナルの活用

本コースにおける評価課題で美術ジャーナルを活用する主な機会については、本資料で後述する各評価課題を参照してください。



作品制作の形式

生徒には本コースを通して多様な作品制作および作品概念の形式を経験することが求められています。SLの生徒は、最低限の要件として、下記の表の異なる列から選択した少なくとも2つの形式を用いた作品制作を経験しなければなりません。HLの生徒は、最低限の要件として、下記の表の異なる列から選択した少なくとも3つの形式を用いた作品制作を経験しなければなりません。下記の例は、説明のために示したもので、これをやらなければいけないという意味をもつものではありません。

平面の形式	立体の形式	カメラやビデオ、電子機器、スクリーンを用いた形式
<ul style="list-style-type: none"> ・ デッサン: 木炭、鉛筆、インクなど ・ 絵画: アクリル、油彩、水彩など ・ 版画: 凸版、凹版、平板、シンコレなど ・ グラフィック: イラスト、デザインなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 彫刻: セラミック、既製品や見出された対象、木材、アッサンブラージュなど ・ デザイン設計: ファッション、建築、船など ・ サイト・スペシフィック／エフェメラル: ランドアート、インスタレーション、壁画など ・ テキスタイル: 繊維、機織り、捺染布など 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 継時的、連続的なアート: アニメーション、劇画、絵コンテなど ・ カメラを使った表現手段: 静止画像、動画、モンタージュなど ・ デジタル／スクリーン上のアート: ベクター画像、ソフトウェア生成品など

地域の芸術家やコレクションにかかわることや、美術館、ギャラリー、展覧会その他の発表などを見学に行くことは、生徒の調査にとって有益な直接的体験の機会となります。生徒の作品に役立てるためにも、これらの機会を生徒はできる限り活用すべきです。生徒はこれらの体験についての感想を美術ジャーナルに記録しなければなりません。

研究

研究を行う際には、生徒には適切な範囲の直接的資料および間接的資料を参照するように促しましょう。研究には、より明確な資料（書籍、ウェブサイト、ビデオ、DVD、記事）だけでなく、ワークショップ、講義、専門家とのやり取り、展覧会の見学を含めてもかまいません。コース中に参照したすべての資料は、学校が選択した引用形式の規則にしたがい、参考文献目録または脚注として提示する必要があります。

シラバスの内容

美術コースには、的確な学習活動や教師と生徒で作り出した教科の資料があり、これにより教師は学校の状況に合わせた授業内容や活動を選択できるようになっています。包括的で全人的な学習のコースを構築するとき、教師は評価課題がシラバス領域からどのように導かれるのかを理解し、正確に把握しなければなりません。また、美術の目的および評価目標にしたがって、生徒が十分に知識を得て技能を身につけられるようなカリキュラムを設計しなければなりません。「文脈に沿った美術」、「美術の方法」および「美術のコミュニケーション」の各コア領域が統合されていることが、本コース全体を通してきわめて重要です。美術シラバス領域と評価課題の関係については、「美術コアシラバス領域と評価課題の関連性」の表を参照してください。

文化的文脈

本資料における「文化的文脈」とは、文化に影響を与え、また文化から影響を受けるような状況を意味します。これらの状況には、歴史的、地理的、政治的、社会的および技術的要因が含まれます。



文脈に沿った美術

「文脈に沿った美術」領域は、「理論的実践」「作品制作の実践」および「キュレーションの実践」を通して美術の文脈を理解するための枠組みとなります。生徒は多様な文化的文脈から芸術家の作品について考察し、これらの文脈が芸術家の創造にどのように影響を与えたかの、また作品の意味や意義が受け手に届けられる方法に影響を与えたのかについて考察することが奨励されています。生徒は芸術家が作品を制作するときを使用した技法と表現手法を特定し、また芸術的意図を実現するためにどのように形式、表現手段、制作過程および技法が使用されているのかについて考えます。生徒は展覧会で芸術作品を鑑賞し、キュレーターの介入によって作品の見られ方がどのように変わるのかについて考えなければなりません。生徒には、多様な作品制作の形式を通して本領域を探究することが求められています。

「文脈に沿った美術」領域では、「理論的実践」、「作品制作の実践」および「キュレーションの実践」を探究するための一連の機会が提供される必要があります。

理論的実践

S LとH Lの生徒がさまざまな時代、場所および文化の芸術家の作品を調査、比較し、一連の批評の方法論を活用して、自身および他者の作品に影響を与える文化的文脈について考察できる機会をもてるよう、教師は徹底してください。生徒は、多様な文化的文脈から作品制作の実践を研究、分析し、また情報に基づいてそれらの比較を行う能力を培います。

生徒は批判的分析の過程を通して指導を受け、多様な起源をもつ一連の芸術作品、オブジェおよび人工製品の数々の形式的特性を特定し、批判しなければなりません。また作品の機能と目的を解釈し、作品が制作された文化的文脈内における意義を分析、判断し、異なる作品を比較対照して、理解した内容を視覚形式と記述形式の両方で明確に説明できることを示さねばなりません。生徒は「文化的文脈」の中で、芸術が進化するきっかけとなり、また芸術が貢献するような歴史的、政治的、社会的、美学的および知的文脈について考察するよう奨励されなければなりません。

この領域の学習活動の例には、以下の活動が含まれます。

- ・ 個人的探究および調査の記録としての美術ジャーナルの活用方法（特に出典の適切な引用方法に重点をおく）
- ・ さまざまな文化的文脈、異なる芸術形式および芸術家に関連して、芸術作品の批評の始め方についての実演、議論、口答および記事方式での発表
- ・ 美術史の授業。これには太古の昔から現代までの進歩と動向の概略、および参照のための年表の提供に加え、背景（歴史的・社会的な影響、文化的・技術的な成果と出来事）の説明が加わることがある
- ・ 芸術学部の図書館、学校の資料館または適切な芸術限定のインターネットサイトの活用を通じて、利用可能な間接的資料（書籍、視聴覚資料など）を確認し、取り組む
- ・ クラス全体で特定作品の形式的特性を特定し議論する
- ・ 芸術作品の分析、批評、解釈および脱構築するための一連のモデルを紹介し、生徒がこれらの作品にかかわり、精通するための機会を提供する
- ・ ギャラリー、図書館、現役の芸術家などの直接的資料および間接的資料を特定し取り組む
- ・ 用語集を活用して芸術の専門用語について学ぶ

作品制作の実践

S LとH Lの生徒が研究と批判的思考、技法の実験の過程を通して作品制作を経験し、特定の技法を自身が展開する作品に応用する機会をもてるよう、教師は徹底しなければなりません。

生徒には、研究の中で特定した作品制作の実践を試し、また多様な文化的文脈から作品制作の実践の分析を試してみる機会が与えられなければなりません。生徒は、特にインスピレーションを受けた芸術家や芸術作品に取り組み、それに関連する技能や表現手段、素材、技法、制作過程を試してみるべきです。たとえば、これらは簡単に「模倣」の形式も

可能で、生徒はその作業を通して作品における特定の要素がどのようにつくられたか、また特定の効果がどのように生み出されたかを探究します。またはさらに詳細な研究を行うことで、芸術家、芸術作品または人工製品から着想を得て、一連の大型作品の制作に至るまでのプロセスを辿るという形式も可能です。コースの進展にしたがい自身が好む専門分野での習熟度を上げられるよう、生徒には広範囲の異なる技能、技法、表現手段、制作過程、素材および実践に触れ、それらを自身の作品制作の戦略のレパートリーに取り入れることが求められます。

この領域の学習活動の例には、以下の活動が含まれます。

- ・ 特定の芸術家の特定表現手段の使用についての技術的な指導および実演（油彩画、インク画、粘土細工、デジタル技法など）
- ・ 特定表現手段および技法の歴史的、技術的变化および進歩の調査
- ・ 生徒が表現手段や技法を活用する際の実践的な指導つきワークショップのセッション（必要に応じて外部の専門家による支援を得る）
- ・ 使用された特定の表現手段と技法、また採用された方法に関連して、指導の下で行う特定の芸術家の影響を受けたプロジェクト
- ・ 関連するクラスの理論の授業（色彩理論、絵の具の歴史など）

キュレーションの実践

教師は、SLとHLの生徒が作品に対する知識に基づいた鑑賞眼を養う経験をするよう促し、生徒は自身の作品制作、作品発表に対する制作意図を明確に説明できるようになる必要があります。

また生徒が見たり体験したりした作品や展覧会に対して、知識に基づいた感想を積極的に述べるよう奨励しなければなりません。生徒には、独自の作品における制作意図を明確に説明し、多様な異なる情報源から受けたインスピレーションを特定できるようになることが求められます。生徒は作品制作を通して独自の考えを明確に表現できるようにならなければなりません

この領域の学習活動の例には、以下の活動が含まれます。

- ・ 指導の下で地域のギャラリーや共同体が取り組む芸術活動を見学（特に、キュレーターの仕事に注目し、アーティスト・ステートメントからそれぞれの芸術家の目的や影響、インスピレーションを特定する）
- ・ 上記の見学後に種々の形式でフィードバックを共有（教師主導、2人一組またはグループでの議論と発表、美術ジャーナルに振り返りを記述、場合によっては正式な課題として行う）
- ・ 生徒自身の作品が他の芸術家の作品からどのような影響を受けるかについての考察。有効な学習ツールとして「模倣」を活用し、美術作品における「流用（アプロプリエーション）」の役割について議論することも可能。
- ・ 他の場所で見えた作品からインスピレーションを得て、芸術作品についての個別のアイデアをまとめたマインドマップ®を描く

美術の方法

本コースの「美術の方法」領域では、生徒は作品制作にかかわるさまざまな過程を探究できます。そのため生徒には、作品制作に必要な技能と技法を培うと共に、自身が展開する芸術的実践を見つめ振り返る機会が与えられなければなりません。生徒は自身の好む作業方法や好みの表現手段、技法、制作過程を特定し、自身の長所や制作意図を自覚できるよう促される必要があります。

生徒には多様な作品制作の形式を通して、この分野を探究することが求められます。

「美術の方法」領域では、生徒が「理論的実践」「作品制作の実践」および「キュレーションの実践」を探究するための一連の機会を提供しなければなりません。

理論的実践

教師は、SLとHLの生徒が美術作品を制作するための種々の技法に目を向け、異なる技術がなぜ、どのように進化してきたか、またかかわったプロセスについて調査、比較する体験をできるようにする必要があります。

生徒は、多様な文化的文脈から多様な作品制作の実践に目を向けなければなりません。生徒は種々の技法と実践がどのように進化してきたかを調査し、それにより独創的な芸術作品の制作に至る多様な技法を理解し、明確に説明できるようになるべきです。

この領域の学習活動の例には、以下の活動が含まれます。

- ・ 芸術における制作過程がどのように変化してきたか、また表現手段や技法が時代と共にどのように発展し技術的に進化してきたかを調査
- ・ 多様な芸術分野、様式、地域の流派、団体を熟知する
- ・ 学校内の芸術部門および他部門における生徒が利用可能な多様な表現手段、技術および設備の説明
- ・ 学校および地域で生徒が利用可能な専門家の知識の特定（地域で活動している芸術家、芸術部門のスタッフが特に関心をもっている分野、他の関連スタッフのICTに関する専門知識、デザイン技術など）
- ・ 生徒にも利用可能な、一連の芸術家が活用している方法や技法の実演、また特定の技法に関する教材（書籍、視聴覚教材など）の提供

作品制作の実践

SLとHLの生徒が多様な表現手段を用いた実験を行い、作品制作のための技法を探究し、技能や技法や表現手段によって特徴づけられた制作過程を通して作品概念を発展させられるよう、教師は徹底しなければなりません。

生徒は、自身の文脈、作品概念の発展および制作意図に合わせて多様な表現手段、技法および制作過程を経験しなければなりません。

この領域の学習活動の例には、以下の活動が含まれます。

- ・ グループまたはクラス全体でのワークショップ、実演。また表現手段および技法を各自が経験しやすくするための個別のアトリエでの実践（平面と立体の形式、それにカメラやビデオ、電子機器、画像ファイルを用いた形式を含む）。ここでは特に、制作過程および技法の歴史的な進歩、またこれらの多様な文化や伝統における活用方法について参照する
- ・ 生徒が、これらの経験で得られた可能性を考察、美術ジャーナルに記録し、個人の制作意図およびアイデアを振り返るように指導する
- ・ 個々の生徒の実践過程の画像による記録
- ・ 作品制作時にその実践をデジタルで記録する手段を探究し、そこで得たスキルを用いて実験と探究の記録を制作

キュレーションの実践

SLとHLの生徒が自身の進行中の作品がどのように意味と目的を伝えるかを分析、判断し、「展示」の本質について考察し、作品選択の過程と作品が多様な受け手に与える潜在的影響について考えるという経験ができるよう、教師は徹底してください。

生徒には、意図した意味と目的がどのように伝わるかに特に焦点をあて、自身の進行中の作品を振り返ることが奨励されています。生徒は、現在作業中の作品をさらに発展させる機会を特定する必要があります。生徒には、「展覧会」の本質について考察し、またギャラリーと美術館の役割と機能について考察することが奨励されています。生徒は自身の制作意図と比べてその成功と失敗を批評しなければなりません。また進行中の作品が公共の場に作品発表された場合、受け手にどのような影響を与えるかも考察する必要があります。

この領域の学習活動の例には、以下の活動が含まれます。

- ・ 招待した芸術家による講演で、芸術家が作品発表の作品をどのようにまとめるか、特に何を含めて何を含まないかという決定について、またその理由について聞く
- ・ 展覧会レビューを検討し、ジャーナルに批評を記入
- ・ 美術館とキュレーターの作為の倫理についてTOKに連結した議論を行う
- ・ 教師または招待した芸術家が主導する模範セッション。アートプロジェクトについて、問いとアイデア、行動と展開、作品概念への技法の応用、進行中の作品または最終作品、もしくはその両者の評価、振り返りに至るまでを詳細に議論する。生徒は、意味や目的、アイデアをうまく伝えること、技法の発展などの観点から批評することを学ぶ
- ・ 同じ方法で行う、グループ討議とフィードバックをともなった生徒による発表
- ・ 上記の論評セッション後の個々のアトリエでの作業に対する取り組みの改善と応用
- ・ 美術ジャーナルを、成功を特定するだけでなく芸術作品の制作過程における「有意義な失敗」の振り返りに活用し、これが以降の実験や探究にどのようにつながるかを考察する

美術のコミュニケーション

本コースの「美術のコミュニケーション」領域は「文脈に沿った美術」および「美術の方法」のコアシラバス領域につながり、またこれらから影響を受けるものです。生徒が進めている一連の作品が完成に近づいてきたら、「美術のコミュニケーション」領域の学習では、受け手に向けた作品の作品発表や発表を支える広範囲にわたるキュレーションの戦略に生徒が取り組むことが奨励されています。ここで生徒は作品発表に向けた作品を選択する過程や棄却する過程、また作品をどのように作品発表するのが一番良いかを考えます。生徒は、複数の作品の技法や作品概念を互いに関連づけ、これが受け手による作品の認識にどのような影響を与えるかを考慮しつつ、時系列や主題を軸にした作品発表を考えることができます。生徒は、形式、表現手段およびコンポジションがどのように意味に影響を与えるかについての理解を示すことになります。

「美術のコミュニケーション」領域では、生徒に「理論的実践」「作品制作の実践」および「キュレーションの実践」を探究するための一連の機会を提供しなければなりません。

理論的実践

S LとH Lの生徒が、知識と理解を最も効果的に伝えるための芸術的選択を行いながら、視覚的および記述的手段を通じたコミュニケーションの方法の探究を経験するよう、教師は徹底しなければなりません。

生徒には、自身の作品や他者の作品が、表明された制作意図をどのように表現できているか、またどのような意味がどのように伝わっているかを特定することが奨励されます。生徒は、展覧会の概念が広範囲にわたり、多くの不確定要素を含むことを理解します。生徒は、公共の場に作品発表されるために完成作品がどこで、どのような理由から選択されているかを調査し、キュレーターの役割とキュレーションの実践を探究し、さらに受け手とのコミュニケーションと作品発表のための意思決定の過程について理解し、正しく認識するようになります。本シラバス領域は、多様な発表形式が受け手や観客に及ぼす影響についても考察します。

この領域の学習活動の例には、以下の活動が含まれます。

- ・ 指導の下でのキュレーターの役割とキュレーションの実践の調査。調査は、ギャラリー見学や芸術家のアトリエ見学、地域の展覧会のカタログの論評、招待した芸術家による発表、新しい作品発表空間の検討などを通して行う。これに付随して、各自が調査内容を美術ジャーナルへ記入し、口頭でのフィードバックも行う。
- ・ アーティスト・ステートメントと作品発表の作品のタイトルや注釈のつけ方に関する一般に認められている表現方法の研究
- ・ 生徒自身のミニ展覧会を通して、習得した知識を自身の作品や他者の作品に対して応用する。展覧会では適切なアーティスト・ステートメントを用意し、作品発表やラベルのつけ方にも注意する

- ・ 想像上の展覧会のキュレーションを行う。展覧会にふさわしい文脈を特定し、特定の芸術家の作品を選び出すか、特定の運動、文化、または伝統から生まれた作品を活用する。またそれに合わせた適切な記録も制作する

作品制作の実践

S LとH Lの生徒が振り返りと分析、判断の過程を通して多数の作品の制作を経験し、それに技能と表現手段と作品概念を総合して示せるよう、教師は徹底しなければなりません。

生徒は発表のために自身の作品を発展させ、それについて受け手に対してどんなメッセージを伝えたいのかを考察し、作品発表に向けたサンプルの選択を開始します。生徒は技法の習熟と作品概念の強さの両方を示す自身の完成作や習作を多数制作します。

この領域の学習活動の例には、以下の活動が含まれます。

- ・ 完成作および習作の吟味、個々の振り返り、および指導の下で行う意思決定
- ・ 制作意図について書いたアーティスト・ステートメントの定期的な草稿作成とその修正
- ・ 生徒自身が作成するアーティスト・ステートメントを踏まえたうえで、それぞれ指導の下で行われる継続的なアトリエ作業
- ・ 発表のテクニックのワークショップ（アーティスト・ステートメント、マットのつけ方、取り付けの仕方、展示レイアウト、およびキャプションの制作を含む）

キュレーションの実践

S LとH Lの生徒が作品発表のために完成作品を選んで発表し、作品がどのようにつながっているかを説明し、さらに芸術的判断が発表全体にどのような影響を与えるかを議論する経験ができるよう、教師は徹底してください。

生徒は完成作品のサンプルを1つ選択し、その作品が発表においてなぜ効果的であるのか、特に自身が明示した意図やその芸術作品に関して伝えたいメッセージに応じて振り返ります。学習シラバスは、生徒が多様な作品を制作、そして作品発表できるような柔軟性をもつべきです。

この経験には、自己を振り返り、また異なる展示風景や展示場所では受け手がどのように作品とかわりをもつかに目を向ける過程が不可欠です。

この領域の学習活動の例には、以下の活動が含まれます。

- ・ それぞれの作品について思慮深い解説の編集を行う
- ・ 作品発表用の作品について考察した、グループ討議やクラス討議をともなったそれぞれの発表。この過程には観客とコミュニケーションができ観客の興味を引くプロジェクトや作品を特定すること、および技術的な観点から作品を批評することも含まれる。討議は進行中の作品の改善や発展に焦点をあてる
- ・ 生徒が編集するキャプションと付随するその他のテキストの例示と確認。生徒は作品発表のための自身の選択を明確にし、その背景を説明し、その根拠を示す。

教師用参考資料

これらの学習活動の提案は、コース要件の達成のために広範囲の刺激的で魅力的なアプローチを促すことを意図しています。これらは活動を規定したり制限したりするためのものではなく、生徒が評価課題の要求に沿って十分に準備できるよう、多くの方法のうちの一部を示したものです。本コースの計画立案および実施を支える詳細な資料については、I B資料『「美術」教師用参考資料』を参照してください。



美術コアシラバス領域と評価課題の関連性

コアシラバスの一部として生徒に求められること (作品制作形式の表から選択した種々のメディア)		評価において生徒に求められること (作品制作形式の表から選択した種々のメディア)	
文脈に沿った美術 芸術家が芸術作品を 制作する理由	美術の方法 芸術作品の制作方法	美術の コミュニケーション 芸術の表現方法	外部/ 内部
<p>時代、場所および文 化の異なる芸術家 の作品を一連の批 評の方法論を活用 して検討、比較す る。</p> <p>自身の作品および 他の芸術家の作品 に影響を与えた文 化的文脈（歴史的、 地理的、政治的、社 会的および技術的 要素）について考察 する。</p>	<p>芸術作品を制作す るさまざまな技法 に目を向ける。</p> <p>さまざまな技法が 進化してきた理由 と方法、またそこで の過程について調 査、比較する。</p>	<p>視覚的および記述 的手段を介したコ ミュニケーション の方法を探索する。 知識と理解を最も 効果的に伝える方 法について芸術的 選択を行う。</p>	<p>「文脈に沿った美術」「美術の方法」および 「美術のコミュニケーション」のコアシラバス 領域から学習したすべてを結びつける：</p> <p>比較研究：生徒はさまざまな芸術家のさまざま な芸術作品を分析、比較する。 この独立した批判的、文脈的調査では、異なる文 化的文脈から芸術作品、オブジェおよびアーティ ファクトを探索する。</p>
			<p>外部 20%</p> <p>内部 20%</p>
		<p>上級レベル (HL)： SLの内容に加え、そ れらの作品および実践 が、考察を行ったい ずれかの芸術／芸術家 からの程度影響を受け ているかについての振 り返しを行う。(3-5 枚の画像ファイル)</p>	
		<p>標準レベル (SL)： 最低2人の異なる芸術 家による最低3つの異 なる芸術作品を比較す る。このとき10-15 枚の画像ファイルを取 り上げ論評する。</p>	
		<p>パート1</p>	
		<p>理論的実践</p>	

実践		コアシラバスの一部として生徒に求められること (作品制作形式の表から選択した種々のメディア)		評価において生徒に求められること (作品制作形式の表から選択した種々のメディア)			
文脈に沿った美術 芸術家が芸術作品を 制作する理由	美術の方法 芸術作品の制作方法	美術の コミュニケーション 芸術の表現方法	外部/ 内部	S L	H L		
<p>研究と批判的思考、技法の実験の過程を経て芸術作品を制作する。 生徒自身の進行中の作品に特定の技法を応用する。</p>	<p>多様なメディアを、実験し、作品制作のための技法を探求する。 技能、技法および表現手段によって特徴づけられる制作過程を通して作品概念を発展させる。</p>	<p>振り返りと評価の過程を通して多数の作品を制作し、技能とメディアと作品概念を総合して示す。</p>	<p>「文脈に沿った美術」「美術の方法」および「美術のコミュニケーション」のコアシラバス領域から学習したすべてを結びつける： プロセスポートフォリオ：生徒は2年間のコースの期間中に行った多様な美術活動での実験、探求、修正および改善の証拠となる資料を注意深く選択し提出する。</p>	<p>標準レベル (S L) : 9 – 18 枚の画像ファイル。 提出される作品は、少なくとも2つの異なる作品制作の形式をとること。</p>	<p>上級レベル (H L) : 13 – 25 枚の画像ファイル。 提出される作品は、少なくとも3つの異なる作品制作の形式をとること。</p>	<p>40%</p>	<p>40%</p>
作品制作の実践		パート 2					

コアシラバスの一部として生徒に求められること (作品制作形式の表から選択した種々のメディア)		評価において生徒に求められること (作品制作形式の表から選択した種々のメディア)			
文脈に沿った美術 芸術家が芸術作品を 制作する理由	美術の方法 芸術作品の制作方法	美術の コミュニケーション 芸術の表現方法	外部/ 内部	S L H L	
実践 キュレーションの実践	生徒が見て体験した作品や展覧会に 対する知識に基づいた鑑賞眼を培う。 生徒が作品を制作、 展示する際に自身の 意図を説明できる ようにする。	生徒の進行中の作 品がどのように意 味と目的を伝える かを評価する。 「展覧会」の本質に ついて考察し、選択 の過程と自身の作 品が異なる受け手 に与える潜在的な 影響について考え る。	展示用に完成作品 を選択し、発表す る。 複数の作品が互い にどのようなこと が起きているかを説 明する。 芸術的判断が発表 全体にどのような 影響するかについ て議論する。	「文脈に沿った美術」「美術の方法」および 「美術のコミュニケーション」のコアシラバス 領域から学習したすべてを結びつける： 展示： 生徒は展示したものから完成作品を選び、 評価のために提出する。 選択した作品は、美術コース期間において生徒が 達成した技法の証拠となり、ビジュアル・コミュニ ケーションにふさわしい素材、アイデアおよび 実践の活用についての理解を示すものであるべ きです。 標準レベル (S L) : 4 - 7 作品 (それぞれ にキャプションを添 付)。 キュレーター・ステー トメント (最大 400 語 (日本語は 800 字))。 上級レベル (H L) : 8 - 11 作品 (それぞ れにキャプションを添 付)。 キュレーター・ステー トメント (最大 700 語 (日本語は 1400 字))。	40% 40%
	美術ジャーナルは本コースのあらゆる側面を支える。 生徒はジャーナル (多様な形式が可能) を活用し、メディアの 実験、研究、振り返り、観察および感想を含む、作品制作の過 程のあらゆる側面を記録する。 本ジャーナルの内容が直接評価されることはないが、提出され た作品の評価を左右するものである。	この表では美術コースがひと目でわかるよう概略を示しています。 右側にある評価課題は、左側の3つのコアカリキュラム領域を踏まえ、そこ から導かれています。各領域または課題の詳細な要件については、本資料の 関連するコアシラバスまたは評価課題のセクションを参照してください。 生徒は本美術コースのあらゆる作業において学問的誠実性の原則にしたがわ なければなりません。各校で採用している一貫した引用形式にしたがい、出 典と同様に、他者の作品、言葉およびアイデアも明示しなければなりません。	パート 3		

ディプロマプログラムにおける評価

概要

評価は、指導および学習と一体化した要素です。DPでは、カリキュラム目標の達成を支援し、生徒に適切な学習を促すことを評価の最も重要なねらいとして位置づけています。

DPでは、学校外で実施されるIBによる外部評価（external assessment）、および内部評価（internal assessment）の両方が実施されます。外部評価のための提出課題はIB試験官が採点します。一方、内部評価のための評価課題は教師が採点し、IBによるモデレーション（評価の適正化）を受けます。

IBが規定する評価には次の2種類があります。

- ・「形成的評価」（formative assessment）は、「指導」と「学習」の両方に指針を与えます。生徒の理解と能力の発達につながるよう、学びの種類や、生徒の長所と短所といった特徴について、生徒と教師に正確で役立つフィードバックを提供します。また、形成的評価からは、科目のねらいと目標に向けての進歩をモニタリングするための情報が得られるので、指導の質の向上にもつながります。
- ・「総括的評価」（summative assessment）は、生徒のこれまでの学習を踏まえて、生徒の到達度を測ることを目的としています。

DPでは、主に履修期間の終了時または終了間近の生徒の到達度を測る総括的評価に重点が置かれています。ただし、評価方法の多くは、指導および学習期間中に形成的に用いることもできます。教師はそうした評価を実施するよう奨励されています。総合的な評価計画は、指導、学習およびカリキュラム編成と一体を成すものです。より詳しくは、IB資料『プログラムの基準と実践要綱』を参照してください。

IBが採用する評価アプローチは、評価規準に準拠した「絶対評価」です。集団規準に準拠した「相対評価」ではありません。この評価アプローチは、生徒の成果を特定の到達の度合いを示す基準に照らし合わせ、そのパフォーマンスを判断するものであり、他の生徒の成果と比較するものではありません。DPにおける評価について、より詳しくはIB資料（英語版）『*Diploma Programme assessment: principles and practice*（ディプロマプログラムにおける評価：原則と実践）』を参照してください。

OCCでは、DPの科目のコースデザイン、指導、および評価の分野で教師を支援するための多様なリソースを入手できます。また、リソースをIBストア（<http://store.ibo.org>）で購入することもできます。レポートの見本、マークスキーム（採点基準）、教師用参考資料、科目レポートおよび成績の説明については、OCCも参照してください。試験問題例題とマークスキームはIBストアで購入できます。

評価方法

I Bは複数の方法を用いて、生徒の成果を評価します。

評価規準

評価規準 (assessment criterion) は、オープンエンド型の課題に対して適用されます。各規準は生徒が身につけることが期待されている特定の能力に重点を置いています。評価目標は「何ができるべきか」を明確にし、評価規準は「どの程度よくできるべきか」を到達の度合いを示す基準に照らし合わせて測ります。評価規準を採用することで、個々のさまざまな解答の違いを識別することが可能となり、多様な解答を奨励することにつながります。

各規準には、どのような基準を満たすと特定のレベルに到達していると判断されるのかが詳細に説明されています。その説明は到達レベル別に段階的に並べられ、レベルごとに1つまたは複数の点数が設けられています。また、採点ではベストフィット (適合) モデルを用いて、各規準を個別に適用します。何点かその規準の満点となるかは規準の重要度に応じて異なる場合があります。各規準での得点を合計したものを、その課題に対する総合点とします。

マークバンド (採点基準表)

マークバンド (採点基準表) は、求められる学習成果の基準を一覧にまとめた表です。教師はマークバンドに照らし合わせて、生徒の到達度を判断します。規準ごとに、到達レベルに沿って段階的に到達の度合いを示す基準が並べられています。生徒の学習成果の違いを識別するために、各レベルの点数には幅をもたせてあります。個々の学習成果物にどの点数をつけるかを確定するには、ベストフィット (適合) アプローチを用います。

分析的マークスキーム

分析的マークスキームは、生徒の最終的な解答や、その他特定の種類の答案を要求する試験問題のために制作されます。これらは、各設問に対する総合点を生徒の解答の異なる部分についてどのように配分するかについて試験官に詳細な指示を与えるものです。

採点のための注意事項

評価規準を基に採点する評価の構成要素については、採点のための注意事項が提供されます。採点のための注意事項では、問題の特定の要件に対してどのように評価規準を適用するかが説明されています。

評価での包摂的な配慮

評価での包摂的な配慮は、受験上の配慮の必要な志願者に対して適用できます。これにより、試験を受ける際や、評価対象の概念の知識および理解の表現において不利な条件にある志願者に対する配慮が可能となります。I B資料『受験上の配慮の必要な志願者について』では、学習上の支援が必要な志願者に対して適用できるすべての受験上の配慮について詳述しています。

I B資料（英語版）『*Learning diversity within the International Baccalaureate programmes*（I Bプログラムにおける学習の多様性）』：『*Special educational needs within the International Baccalaureate programmes*（I Bプログラムにおける特殊教育のニーズ）』では、I Bプログラムにおける多様な学習ニーズをもつ志願者の立場を概説しています。不利な環境にある志願者に対する配慮については、I B資料『一般規則：ディプロマプログラム』および『D P手順ハンドブック』を参照してください。

学校の責任

学校はI B資料『受験上の配慮の必要な志願者について』、およびI B資料（英語版）『*Learning diversity within the International Baccalaureate programmes*（I Bプログラムにおける学習の多様性）』：『*Special educational needs within the International Baccalaureate programmes*（I Bプログラムにおける特殊教育のニーズ）』にしたがい、学習上の支援が必要な志願者に対して等しく受験上の配慮を与える必要があります。

教師用参考資料

各評価課題に含まれる評価資料の構成に関する助言は、あくまでも参考用であり、規定や規制を意図するものではありません。評価課題の構成については、I B資料『「美術」教師用参考資料』に他の例を示してあります。



評価の概要 — 標準レベル（SL）

2016年 第1回試験

評価課題	配点比率
<p>外部評価</p> <p>パート1：比較研究</p> <p>SLの生徒はさまざまな芸術家によるさまざまな芸術作品を分析、比較します。この独立した批判的、文脈的な調査では、異なる文化的文脈から芸術作品、オブジェおよび人工製品を探究します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ SLの生徒は10－15個の画像ファイルを提出し、そこで少なくとも3作品について考察、比較し、また少なくともそのうち2つは異なる芸術家によるものとする。比較および分析のための作品は、大きく異なる文脈（地域、国家、国家間または異文化間、あるいはその両方）から選ばなければなりません。 ・ SLの生徒は使用した資料のリストを提出します。 	<p>20%</p>
<p>パート2：プロセスポートフォリオ</p> <p>SLの生徒は2年間のコースでの多様な美術活動で行った実験、探究、修正および改善の証拠<small>エビデンス</small>となる資料を注意深く選択し、提出します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ SLの生徒は多様な芸術作品の制作活動の継続的な実験、探究、修正および改善の証拠<small>エビデンス</small>となる9－18個の画像ファイルを提出します。SLの生徒の場合、提出される作品は、作品制作形式の表の異なる列から選んだ少なくとも2つの作品形式をとらなければなりません。 	<p>40%</p>

評価課題	配点比率
<p>内部評価</p> <p>この課題は、コース終了時に教師によって内部評価が行われ、さらにIBにより評価の適正化が行われます。</p> <p>パート3：作品発表</p> <p>SLの生徒は作品発表で展示したものから完成作品を選び、評価のために提出します。選択した作品は、美術コース期間において生徒が達成した技法の証拠^{エビデンス}となり、ビジュアル・コミュニケーションにふさわしい素材、アイデアおよび実践の活用についての理解を示すものであるべきです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ SLの生徒は400語（日本語は800字）以内のキュレーター・ステートメントを提出します。 ・ SLの生徒は4－7作品を提出します。 ・ SLの生徒は選択した各作品についてキャプション（作品タイトル、表現技法、サイズおよび制作意図を記入したもの）を提出します。 <p>SLの生徒は自身の作品発表の様子全体を写した写真2枚を提出してもかまいません。この写真は、展示の風景、および作品のサイズと範囲の理解を促すものです。これらの写真は個々の作品の評価に使われることはありませんが、作品発表における受け手の総合的な体験を志願者がどのように考慮したか、モデレーターが推測する手がかりとなることがあります。</p>	<p>40%</p>

評価の概要 — 上級レベル（HL）

2016年 第1回試験

評価課題	配点比率
<p>外部評価</p> <p>パート1：比較研究</p> <p>HLの生徒はさまざまな芸術家によるさまざまな芸術作品を分析、比較します。この独立した批判的、文脈的な調査では、異なる文化的文脈から芸術作品、オブジェおよび人工製品を探究します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ HLの生徒は10 – 15枚の画像ファイルを提出し、そこで少なくとも3作品について考察、比較し、また少なくともそのうち2つは異なる芸術家によるものとします。比較および分析のための作品は、異なる文脈（地域、国家、国家間または異文化間、あるいはその両方）から選ばなければなりません。 ・ HLの生徒は3 – 5枚の画像ファイルを提出し、そこで自身の作品と実践がどれほど考察した芸術および芸術家から影響を受けたかを分析します。 ・ HLの生徒は使用した資料のリストを提出します。 	<p>20%</p>
<p>パート2：プロセスポートフォリオ</p> <p>HLの生徒は2年間のコースでの多様な美術活動で行った実験、探究、修正および改善の証拠^{エビデンス}となる資料を注意深く選択し、提出します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ HLの生徒は多様な芸術作品の制作活動の継続的な実験、探究、修正および改善の証拠^{エビデンス}となる13 – 25枚の画像ファイルを提出します。HLの生徒の場合、提出される作品は作品制作形式の表の最低2つの列から選んだ少なくとも3つの作品形式をとらなければなりません。 	<p>40%</p>

評価課題	配点比率
<p>内部評価</p> <p>この課題は、コース終了時に教師により内部評価され、さらにIBにより評価の適正化が行われます。</p> <p>パート3：作品発表</p> <p>HLの生徒は作品発表で展示したものから完成作品を選び、評価のために提出します。選択した作品は、美術コース期間において生徒が達成した技法の証拠^{エビデンス}となり、ビジュアル・コミュニケーションにふさわしい素材、アイデアおよび実践の活用についての理解を示すものであるべきです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ HLの生徒は700語（日本語は1400字）以内のキュレーター・ステートメントを提出します。 ・ HLの生徒は8－11作品を提出します。 ・ HLの生徒は選択した各作品についてキャプション（作品タイトル、表現技法、サイズおよび制作意図を記入したもの）を提出します。 <p>HLの生徒は自身の作品発表の様子全体を写した写真2枚を提出してもかまいません。この写真は、展示風景や作品のサイズ、範囲の理解を促すものです。これらの写真は個々の作品の評価に使われることはありませんが、作品発表における受け手の総合的な体験を志願者がどのように考慮したか、モデレーターが推測する手がかりとなることがあります。</p>	<p>40%</p>

外部評価

美術における生徒の評価に用いる方法として、各評価課題にそれぞれ詳細な評価規準があります。評価規準は本資料に掲載されています。またこれは美術コースおよび芸術の成績のレベルの説明のために設定された評価目標に関連しています。

外部評価課題－S L およびH L

パート1：比較研究

配点比率：20%

生徒は、さまざまな芸術家による芸術作品、オブジェまたは人工製品を分析、比較する必要があります。この独立した批判的、文脈的調査では、異なる文化的文脈から芸術作品、オブジェおよび人工製品を探究しなければなりません。

本コースでは、生徒は3つのシラバス領域（「文脈に沿った美術」「美術の方法」および「美術のコミュニケーション」）を総合的に探究するアプローチを通して、多様な文化的文脈からの一連の芸術家、様式、イメージおよびオブジェを調査します。生徒は、異なる文化的文脈から芸術作品、オブジェおよび人工製品を選び、比較します。これらの作品制作の形式は問わず、生徒個人が共鳴し、自身の作品制作の実践に関連するものでかまいません。この点は特にH Lの生徒にとって重要です。

S LとH Lのいずれの生徒も、少なくとも3作品について考察、比較し、そのうちの2つは異なる芸術家の作品でなければなりません。ギャラリーの絵画、公園の彫像または地域の共同体から学校にもち込まれた人工製品など、少なくとも1つの作品を実際の時空間において体験することは、生徒にとって有益です。ただしこれは必須ではありません。生徒のおかれた地理的条件から、上記のような作品を直接体験できない場合は、良質の複製品を参照するのでもかまいません。比較および分析のための作品は、異なる文化的文脈から選ばなければなりません。

生徒は研究や探究のスキルを活用して選択した作品を調査、解釈します。考察する作品に批評理論および方法論の観点を応用し、そこでの研究成果を自ら批評的に振り返った分析として視覚形式と記述形式の両方で表現して発表します。生徒は、堅実で信頼できる資料によって自身の解釈の根拠を示さなければなりません。学校の学問的誠実性の方針に沿って、認められている学問的な引用体系を活用してください。I B資格取得志願者が引用元を明記しない場合、I Bは規制違反の可能性として調査を行い、I B資格授与委員会によりペナルティーを課されることがあります。

準備の過程

コアシラバスにおける本課題の準備のために、S LとH Lの生徒は以下の経験が必要です。

	文脈に沿った美術	美術の方法	美術の コミュニケーション
理論的実践	一連の批評の方法論を用いて異なる文化的文脈から芸術家の作品を考察、比較する。 自身の作品および他者の作品に影響を与えている文脈について考察する。	芸術作品を制作するさまざまな技法に目を向ける。 さまざまな技法が進化してきた理由と方法、またそこでの過程について調査、比較する。	視覚的および記述的手段を介したコミュニケーションの方法を探究する。 知識と理解を最も効果的に伝える方法について芸術的選択を行う。
美術ジャーナル	体験したことや学習したことを、印象、振り返りおよび関連するすべての研究と共に美術ジャーナルに記録する。		

生徒はその後、下記の評価のための過程に進みます。

課題の詳細

S LおよびH Lの生徒は少なくとも3つの芸術作品、オブジェまたは人工製品を選択しなければなりません。またそのうちの少なくとも2つは異なる芸術家の作品とします。選択した各作品について、生徒は以下を行います。

- ・ 一連の異なる資料から研究を行う
- ・ 選択した作品が制作された文化的文脈を分析する
- ・ 選択した作品の形式的特性を特定する
- ・ 選択した作品の機能と目的を解釈する
- ・ 選択した作品をそれが制作された文化的文脈に照らし合わせ、作品の物質的、概念的および文化的意味を分析、判断する

その後、S LとH Lの生徒は以下を行います。

- ・ 選択した作品を比較して、文化的文脈、形式的特性、機能、目的、素材、概念的的重要性および文化的重要性がどのように関連しているか特定する
- ・ 研究中に用いた資料のリストを提示する

H Lの生徒については、調査結果を振り返り、比較研究で考察した芸術作品、オブジェまたは人工製品から、自身の作品制作の実践や作品がどの程度影響を受けたかも振り返ります。

評価課題における美術ジャーナルの活用

生徒は自身の調査や選択した作品に対する感想を記録するため、特に美術ジャーナルを活用すべきです。また自身による詳細な解釈や評価、比較も記録します。生徒は、比較研究課題の下地としてジャーナルに記録した内容を用い、ここから選択、調整して発表します。



教師の役割

上述のコアシラバス活動を入念に計画し実施することにより、生徒が本課題の要求に対して適切な準備を整えられるよう、教師は徹底しなければなりません。本評価課題は教師主導であってはならず、生徒は自身の作品が判定される際の評価規準を完全に把握する必要があります。

教師は、選択される芸術作品、オブジェおよび人工製品について各生徒と話し合ってください。ただし選択された作品は生徒自身が選んだものであることが重要です。また生徒が活用したすべての資料をきちんと取り上げ適切に引用するよう、教師は徹底してください。

教師は比較研究の草稿を一度読んで生徒に助言を与えるべきです。教師は比較研究を改善する方法を口答または文書で助言することはできませんが、草稿を編集してはなりません。その次に教師に渡される版が、提出用の最終版となります。

比較研究の構成

生徒は、研究結果を表現し伝えるのに最適な手段にしたがい、自身の理解について視覚形式と記述形式の両方で明確に表現しなければなりません。比較研究はテキストベースの分析を含んでもよく、また注釈付きのスケッチおよび略図などの図表およびグラフィック要素、芸術作品の複製につけた注釈、それに他の情報の視覚化整理のテクニック（フローチャート、相対的重要度グラフ、コンセプト・ウェブ、マインドマップ[®]など）を含んでもかまいません。研究の導入部では、焦点となる芸術作品、オブジェおよび人工製品を選び出した元の研究範囲を要約するべきです。生徒は、視覚的な内容と記述的な内容のバランスをとるようにし、また適切な方法で出典を明らかにしてください。生徒は、自身の成果物で必要に応じて科目特有の言語を適切に使用するよう努めてください。

S LとH Lの生徒には、選択したそれぞれの芸術作品、オブジェまたは人工製品について、芸術家と作品、受け手、文化的文脈の役割を考慮して、作品の分析と解釈に焦点をあてることが奨励されています。比較研究課題の範囲と規模は、調査のために選択した素材に大きく依存します。ただし、生徒は必要に応じて以下の構成を採用することもできます。これはあくまで説明のためのもので、規定や規制を意図するものではありません。

はじめに

生徒は、焦点となる芸術作品、オブジェおよび人工製品、そして調査を引き出すために使用したテーマや概念の枠組みがあれば、それも含めて、選び出した元の研究範囲を要約します。

芸術作品、オブジェまたは人工製品とその文脈

生徒は一連の異なる資料から自身の研究について要約し、選択した芸術作品、オブジェおよび人工製品を特定し、解釈に向けた探究について示します。また、生徒は一連の批評理論と方法論やその組み合わせをどのように作品に応用したかを説明します。調査の領域には以下の例が挙げられます。

- ・ 選択した作品の文化的文脈の分析
- ・ 選択した作品の形式的特性の特定（形／形式、空間、色調、色、線、質感などの要素、バランス、リズム、均衡、強調、パターン、多様性などの法則）
- ・ 選択した作品の機能と目的の解釈（作品内で使用したモチーフ、記号、象徴の意味など）
- ・ 作品の素材や作品概念、文化における重要性、およびそれが制作された文化的文脈の評価。

関連づけ

生徒は作品間の関連性を明確に特定しつつ、異なる作品を比較します。

これらの比較には以下の例が挙げられます。

- ・ 選択した作品の文化的文脈の比較
- ・ 選択した作品の形式的特性の比較
- ・ 選択した作品の機能および目的の比較
- ・ 作品の素材、作品概念および文化における重要性の比較

自身の作品制作の実践への関連づけ（HLのみ）

生徒は、調査結果を振り返り、比較研究で考察した芸術作品、オブジェまたは人工製品から自身の作品制作の実践や作品がどの程度影響を受けたかを振り返ります。

このような影響および個人的な関連性は視覚形式と記述形式の両方でその証拠^{エビデンス}を示さねばなりません。具体的には以下を示します。

- ・ 文化的文脈
- ・ 形式的特性
- ・ 機能と目的
- ・ 素材、作品概念および文化における重要性

HLの生徒は、自身の作品および実践に言及するときは、他の資料からイメージについて言及するとき同様、細部にまで厳密な注意を払って作品を特定し認識する必要があります。

出典

生徒は研究中に用いた資料のリストを挙げます。

学問的誠実性

比較研究で活用したすべてのイメージは、学校が選んだ引用形式の規則にしたがい、作品タイトル、制作者、制作年（情報がわかる場合）、出典を確認できるよう適切に引用されなければなりません。HLの生徒が自身のオリジナル作品のイメージを含める場合、これらのイメージも同様に認識、確認される必要があります。



課題の形式的な要件－S L

- ・ S Lの生徒は10－15枚の画像ファイルを提出する。そこで少なくとも3つの芸術作品、オブジェまたは人工製品について考察、比較し、また少なくともそのうち2つは異なる芸術家によるものとする。比較および分析のための作品は、異なる文化的文脈から選ばなければならない。
- ・ S Lの生徒は使用した資料のリストを提出する。

課題の形式的な要件－H L

- ・ H Lの生徒は10－15枚の画像ファイルを提出する。そこで少なくとも3つの芸術作品、オブジェまたは人工製品について考察、比較し、また少なくともそのうち2つは異なる芸術家によるものとする。比較および分析のための作品は、異なる文化的文脈から選ばなければならない。
- ・ H Lの生徒は3－5枚の画像ファイルを提出し、そこで自身の作品と実践がどれほど考察した芸術および芸術家から影響を受けたかを分析する。
- ・ H Lの生徒は使用した資料のリストを提出する。

評価課題の提出

評価のために提出される画像ファイルのサイズと形式は規定されていません。提出された資料はスクリーン上で評価されるため、生徒は自身の作品がデジタル形式でスクリーン上に表示されたときに鮮明に判読可能であるよう万全を期してください。生徒は、自身のジャーナルの内容の複数ページをスキャンし、それらをひとつの画像ファイルとして提出してはなりません。たとえば、ファイルが過密状態や判読不可能な場合、試験官は作品の意図を解釈、理解することができないおそれがあります。

評価用の作品を提出する手順については、I B資料『DP手順ハンドブック』を参照してください。資料の提出の際、生徒は含まれる画像ファイル数を示すようにしてください。提出された資料が規定の画像ファイル数の制限を超えている場合、試験官は制限内の資料のみに基づいて評価を行うことになっています。

外部評価規準－S L およびH L

パート1：比較研究

まとめ

パート1：比較研究		評点	合計実施時間
A	形式的特性の分析	6	30
B	機能と目的の解釈	6	
C	文化的重要性の評価	6	
D	比較と関連づけ	6	
E	発表と科目特有の言語	6	
F	(H Lのみ) 自身の作品制作の実践への関連づけ	12	42

規準

A. 形式的特性の分析

以下の点を成果物がどの程度示しているかを見ます。

- ・ 選択した芸術作品、オブジェおよび人工製品の形式的特性を適切に特定し分析できているか。

少なくとも2人の異なる芸術家による少なくとも3つの作品について考察、比較していない志願者には、本規準における3を超える評点は与えられません。

得点	レベルの説明
0	成果物が下記のいずれのレベルにも達していない
1-2	少なくとも2つの文化的起源から作品を選択し、形式的特性のいくつかを特定している。分析がわずかしが行われていないか、まったく行われていない。
3-4	少なくとも2つの文化的起源から作品を選択し、形式的特性のいくつかを特定している。ただし「形式的な質」の分析に一貫性がない。
5-6	少なくとも2つの文化的起源から作品を選択し、形式的特性を特定し分析している。形式的特性の分析に一貫性があり、効果的である。

B. 機能と目的の解釈

以下の点を成果物がどの程度示しているかを見ます。

- ・ 選択した芸術作品、オブジェおよび人工製品の制作された文化的文脈における機能と目的について、情報に基づき適切に解釈されているか。

少なくとも2人の異なる芸術家による少なくとも3つの作品について考察、比較していない志願者には、この規準において3を超える評点は与えられません。

得点	レベルの説明
0	成果物が下記のいずれのレベルにも達していない
1 - 2	選択した作品の制作された文化的文脈における機能と目的について解釈を示している。ただし解釈はほとんど深められておらず、表面的、または個人的意見に大きく依存している。
3 - 4	選択した作品の制作された文化的文脈における機能と目的について解釈を示している。ただし必ずしも解釈が一貫した情報に基づき深められているとは限らない。
5 - 6	選択した作品の制作された文化的文脈における機能と目的について、一貫して情報に基づいた適切な解釈が示されている。

C. 文化的重要性の評価

以下の点を成果物がどの程度示しているかを見ます。

- ・ 選択した芸術作品、オブジェおよび人工製品の制作された文化的文脈における文化的重要性について情報に基づき理解しているか。

少なくとも2人の異なる芸術家による少なくとも3つの作品について考察、比較していない志願者には、この規準において3を超える評点は与えられません。

得点	レベルの説明
0	成果物が下記のいずれのレベルにも達していない
1 - 2	選択した作品の制作された特定の文脈における素材や作品概念、文化における重要性に対する評価を示している。ただし評価はほとんど深められておらず、表面的、または個人的意見に大きく依存している。
3 - 4	選択した作品の制作された特定の文脈における素材や作品概念、文化における重要性に対する評価を示している。ただし必ずしも評価が一貫した情報に基づき深められているとは限らない。
5 - 6	選択した作品の制作された特定の文脈における素材や作品概念、文化における重要性について、一貫して情報に基づいた適切な評価が示されている。

D. 比較と関連づけ

以下の点を成果物がどの程度示しているかを見ます。

- ・ 選択した芸術作品、オブジェおよび人工製品の間に見られる関連性、類似点および相違点を的確に特定し、批判的に分析しているか。

少なくとも2人の異なる芸術家による少なくとも3つの作品について考察、比較していない志願者には、この規準において3を超える評点は与えられません。

得点	レベルの説明
0	成果物が下記のいずれのレベルにも達していない
1 - 2	選択した作品間の関連性、類似点および相違点を簡単に述べているが、批判的な分析はほとんどなされていない。また示された関連性は非常に表面的か不適切で、作品の比較方法についての最低限の理解しか見られない。
3 - 4	選択した作品間の関連性、類似点および相違点を簡単に述べているが、批判的な分析が十分深められていない部分がある。示された関連性は論理的で一貫性しており、作品の比較方法について十分な理解を示している。
5 - 6	選択した作品間の関連性、類似点および相違点を批判的に分析している。示された関連性は論理的で一貫しており、作品の比較方法について完全な理解を示している。

E. 発表と科目特有の言語

以下の点を成果物がどの程度示しているかを見ます。

- ・ 適切な科目特有の言語を援用し、視覚的にも適切かつ読みやすい方法で、明確で一貫性のある表現を行うよう努めているか。

得点	レベルの説明
0	成果物が下記のいずれのレベルにも達していない
1 - 2	明確で視覚的にも適切な方法で情報を伝えようとしているが、その試みは一貫しておらずまた常に適切というわけではない。科目特有の言語を用いようとしているが、その試みが稀にしか見られない、または用い方が不正確である。
3 - 4	視覚的にも適切かつ読みやすい方法で明確に情報を伝達しており、ある程度一貫して科目特有の言語を適切に使用している。
5 - 6	明確かつ理路整然と情報を伝達しており、視覚的にも適切で、読みやすく興味を引く研究となっている。全体を通して科目特有の言語を正確かつ適切に使用している。

HLのみ

F. 自身の作品制作の実践への関連づけ

以下の点を成果物がどの程度示しているかを見ます。

- ・ 選択した1つ以上の作品と自身の作品の制作過程と実践の間に見られる関連性を特定した上で、比較研究の結果と、この研究が生徒自身の芸術家としての成長にどのように影響したかを分析し振り返っているか。

得点	レベルの説明
0	成果物が下記のいずれのレベルにも達していない
1-3	研究の結果が簡単に述べられているが、自身の作品制作の実践とほとんど関連づけられていないか、表面的にしか関連づけられていない。
4-6	研究の結果は詳しく述べられているが、自身の成長とのかかわりについては考察されていない。生徒は自身の作品制作の実践への関連づけを試みているが、一貫性がないか表面的である。
7-9	研究の結果について振り返り、一貫して自身の成長について分析と考察を試みているが深さに欠ける。自身の作品制作の実践への有意な関連づけはできているが、展開が不十分である。
10-12	一貫して適切に研究の結果を分析し振り返っている。自身の成長についての確かな考察を行い、自身の作品制作の実践への情報に基づいた有意な関連づけを行っている。

外部評価課題－SLとHL

パート2：プロセスポートフォリオ

配点比率：40%

SLとHLの生徒は、2年間の本コースでの多様な美術活動で行った実験、探究、修正および改善を示す資料を注意深く選択し、提出します。成果物は生徒の美術ジャーナルおよび他のスケッチブック、ノート、フォリオなどから抜き出したものでもかまいません。ただし、完成作と習作の両方の制作を示すものでなければなりません。選択したプロセスポートフォリオの作品は、美術コース期間において生徒が達成した技法の証拠^{エビデンス}となり、ビジュアル・コミュニケーションにふさわしい素材、アイデアおよび実践の活用についての理解を示していなければなりません。また、可能な限り高いレベルの評価規準の要件を満たすよう注意深く選択する必要があります。

提出用に選択した作品は、生徒が自身の作品制作の技能の基盤を拡張するために、どのように多様な技法、効果および過程を探究し作業に取り組んだかを示すものでなければなりません。ここで結果の改善をもたらした可能性のある実験には、集中的に取り組んだもの、試験的なもの、発展的なもの、観測に基づくもの、技能に基づくもの、内省的なもの、想像上のもの、また創造的なものなどがあります。

準備の過程

コアシラバスにおける本課題の準備のために、SLとHLの生徒は以下の経験が必要です。

	文脈に沿った美術	美術の方法	美術の コミュニケーション
作品制作の実践	研究、批判的思考および技法の実験を行う過程を通して作品を制作する。 特定の技法を自身が進める作品に応用する。	多様な表現手段を実験し、作品制作のための技法を探究する。 技能、技法および表現手段によって特徴づけられる制作過程を通して作品概念を発展させる。	振り返りおよび評価の過程を通して多数の芸術作品を制作し、技能と表現手段と作品概念を総合して示す。
美術ジャーナル	体験したことや学習したことを、印象、振り返りおよび関連するすべての研究と共に美術ジャーナルに記録する。		

生徒はその後、以下の評価のための過程に進みます。

課題の詳細

SLとHLの生徒は以下を行います。

- ・自身の技能の基盤を拡張するために、多様な技法、技術、効果および過程を探究し、作業に取り組み、自身の制作意図に沿った表現手段、形式および目的の選択について自分なりの判断を下す
- ・自身の制作過程を振り返り、多様な方法で表現手段を活用するための実験、探究、修正および改善の過程についても学習する
- ・アイデアと芸術作品を研究し深めた証拠^{エビデンス}となるような多数の作品を展開し、アイデアと表現手段の統合を示す。

評価課題における美術ジャーナルの活用

すべての生徒は技法、技術、効果および過程の探究を行う際、またその成果を記録する際に自身の美術ジャーナルを活用する必要があります。また表現手段の実験、意思決定、芸術的意図の形成について図表化して振り返るべきです。生徒はプロセスポートフォリオの課題のために提出する資料の下地として、自身のジャーナルに記録した内容を用い、ここから選択、調整して発表します。



教師の役割

上述のコアシラバス活動を入念に計画し実施することにより、生徒が本課題の要求に対して適切な準備を整えられるよう、教師は徹底しなければなりません。本評価課題は教師主導であってはならず、生徒は自身の作品が判定される際の評価規準を完全に把握する必要があります。

生徒がプロセスポートフォリオの課題に取り組んでいる間、教師は各生徒と技法や効果、制作過程の実験について話し合ってください。提出されるプロセスポートフォリオの画像ファイルは、生徒自身で選んだものであることが重要です。生徒が、活用したすべての資料をきちんと取り上げ適切に引用するよう、教師は徹底してください。生徒が作品制作形式の表に示してある通りの数の作品制作の形式に取り組むよう、教師は徹底してください。

プロセスポートフォリオの構成

生徒はコースを通じて自身の興味、アイデアおよび長所を追求してきたことでしょう。提出される成果物はその進展をはっきりと示す道標であるべきです。提出物には、スキャンされたページ、写真またはデジタルファイルが含まれていてもかまいません。プロセスポートフォリオの画像ファイルは、スケッチ、イメージ、デジタルデッサン、写真またはテキストなど多様な形式をとることができます。生徒が1つの画像ファイルに含める項目数に制限はありませんが、ファイルが過密状態や判読不可能な場合、試験官は作品の意図を解釈し理解することができなくないおそれがあるので注意が必要です。

選択された画像ファイルは、生徒が作品制作のために活用した技法の持続的な探究について、素材、技術および技法の実験、探究、修正および改善の方法について、またこれらがどのように進めている作品に応用されたかの証拠エビデンスとなるようなものであるべきです。生徒は、表現手段、形式および目的の選択において、自身の制作意図に沿ってどこで自分なりの判断を下したかを示さなければなりません。ポートフォリオは、生徒のアイデアおよび作品の研究と発展を伝え、アイデアと表現手段の統合の証拠エビデンスとなるようなものでなければなりません。この過程では必然的に完成作と習作がつけられます。出願者はここでの成功と失敗を等しく価値のある学習体験として考察しなければなりません。

試験官は、以下の証拠エビデンスに対して高い評価を与えます。

- ・ 多様な表現手段および技法に対する持続的な実験および修正、また表明された制作意図にふさわしい作品制作の素材や表現手段を選択する能力
- ・ 芸術家、芸術作品および芸術ジャンルの批判的な研究から影響を受けた継続的な取り組みや、自身の実践がどのようにこれらに影響を与えられたかの証拠エビデンス
- ・ 最初のアイデアと制作意図がどのように形成されたか、また技能と選択した表現手段とアイデアの間をどのように関連づけたか
- ・ 芸術家としての技能習得と進歩の分析を振り返ることで、アイデア、技能、制作過程および技法がどのように改善、改良されたか
- ・ 提出された画像ファイルが、一貫して適切に科目特有の言語を用いてどれほど明確かつ理路整然と提示されているか

生徒は自身の成果物で科目特有の言語を的確に用いるよう努めなければなりません。

学問的誠実性

プロセスポートフォリオで使用されるすべてのイメージは、学校が選択した引用形式の規則にしたがい、作品タイトル、制作者、制作年（この情報がわかる場合）および出典を確認できるよう適切に引用されなければなりません。生徒は、試験官が資料の出所を明確に知ることができるようにするのと同じ方法で、自身の創作品もまた特定し、確認できるようにしなければなりません。生徒が他者の作品、アイデアまたはイメージが自身の作品概念や進めている作品に影響を与えたことを知りながら、作品中でそのことに直接言及しない場合は、提出されるポートフォリオの画像ファイルに出典を参照文献目録として示す必要があります。提出される画像ファイルには、パート 3：作品発表の評価課題の完成作品を含めてはなりません。



作品制作の形式

S Lの生徒の場合、提出される作品は少なくとも**2つ**の作品形式をとり、それぞれが下記の表の異なる列のものでなければなりません。H Lの生徒の場合、提出される作品は少なくとも**3つ**の作品形式で制作され、下記の作品制作形式の表の最低2つの列から選んだものでなければなりません。下記の例は、説明のために示したもので、限定的な意味をもつものではありません。

平面の形式	立体の形式	カメラやビデオ、電子機器、画像ファイルを用いた形式
<ul style="list-style-type: none"> ・ デッサン：木炭、鉛筆、インクなど ・ 絵画：アクリル、油、水彩など ・ 版画：凸版、凹版、平板、シンコレなど ・ グラフィック：イラスト、デザインなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 彫刻：セラミック、すでに見出された対象、木材、アッサンプラージュなど ・ デザイン：ファッション、建築、船など ・ 特定地域のアート／一過性のアート：ランドアート、インスタレーション、壁画など ・ テキスタイル：繊維、機織り、織物など 	<ul style="list-style-type: none"> ・ タイム・ベース・アートおよびシーケンシャル・アート：アニメーション、グラフィックノベル、絵コンテなど ・ カメラを使った表現手段：静止画像、動画、モニタージュなど ・ デジタル／画像：ベクター画像、ソフトウェア生成品など

提出される作品は、特定の表現手段でのセッションの見本として行われた実験（とそれについての考察）や、技法の実演、ワークショップ、公開レッスン、指導の下に行われた実験や上記のコアシラバス活動の一部として体験したアトリエでの実践などでもかまいません。

課題の形式的な要件－S L

- ・ S Lの生徒は多様な芸術作品の制作活動の継続的な実験、探究、修正および改善の証拠となる9－18枚の画像ファイルを提出する。S Lの生徒の場合、提出される作品は少なくとも**2つ**の作品形式をとり、それぞれが作品制作形式の異なる列から選んだものでなければならない。

課題の形式的な要件－H L

- ・ H Lの生徒は多様な芸術作品の制作活動の継続的な実験、探究、修正および改善の証拠となる13－25枚の画像ファイルを提出する。H Lの生徒の場合、提出される作品は、作品制作形式の表の最低2つの列から選んだ少なくとも**3つ**の芸術作品の形式をとらなければならない。

評価課題の提出

提出される画像ファイルには、パート3：作品発表の評価課題の完成作品を含めてはなりません。

評価のために提出される画像ファイルのサイズと形式は規定されていません。提出された資料はスクリーン上で評価されるため、生徒は自身の作品がデジタル形式でスクリーン上に表示されたときに鮮明で判読可能であるよう万全を期してください。生徒は、自身のジャーナルの内容の複数ページをスキャンし、それらを1枚の画像ファイルとして提出してはなりません。たとえば、ファイルが過密状態や判読不可能な場合、試験官は作品の意図を解釈し、理解することができないおそれがあります。

評価用の作品を提出する手順については、IB資料『DP手順ハンドブック』を参照してください。生徒は資料の提出時に画像ファイル数を示すようにしてください。提出された資料が規定された画像ファイル数の制限を超えている場合、試験官は制限内の資料のみに基づいて評価を行うことになっています。

外部評価規準－SLおよびHL

パート2：プロセスポートフォリオ

まとめ

パート2：プロセスポートフォリオ		SL 評点	SL 合計点	HL 評点	HL 合計点
A	技能、技法および制作過程	12	34	12	34
B	批判的研究	6		6	
C	アイデアと制作意図の伝達	6		6	
D	見直し、改良および振り返り	6		6	
E	発表と科目特有の専門用語	4		4	

規準

A. 技能、技法および制作過程

作品制作形式の表から必要な数の形式を選んで活用した作品が、どの程度以下の内容を示しているかを見ます。

- ・ 一連の技能、技法および制作過程の持続的な実験および修正をし、自身の制作意図にふさわしい素材を選んで活用できることを示しているか。

提出作品の表現手段や形式が最低限の数に満たない生徒には、本規準における3を超える評点は与えられません。

得点	レベルの説明
0	成果物が下記のいずれのレベルにも達していない
1-3	技能、技法、制作過程および素材の選択においてある程度の実験や修正を行ったことを示しているが、その内容が不適切であるか、または制作意図に沿っていない。また首尾一貫していない。
4-6	少なくとも必要な数の表現手段および形式を使用しており、ある程度の技能、技法、制作過程および素材を適切に選んで実験や修正を行ったことを示している。その内容も大部分が制作意図に沿ったものである。ただし時に表面的な内容にとどまっている。
7-9	少なくとも必要な数の表現手段および形式を使用しており、一連の技能、技法および制作過程について目的意識をもって実験や修正を行ったことを示している。素材の選択は、ほとんど一貫して制作意図に沿っている。
10-12	少なくとも必要な数の表現手段および形式を使用しており、一連の技能、技法および制作過程について確実に持続的な実験、修正を行ったことを示している。また一貫して制作意図に最も即した素材を選んだことがわかる。

B. 批判的研究

以下の点を成果物がどの程度示しているかを見ます。

- ・ 芸術家、芸術作品および芸術ジャンルの批判的研究を行い、これにより自身が進める作品制作の実践や制作意図が受ける影響について生徒の理解が深まっていることを伝えているか。

得点	レベルの説明
0	成果物が下記のいずれのレベルにも達していない
1-2	限定的な批判的研究しか行われておらず、生徒が進める芸術の実践や制作意図への影響についてほとんど認識していないか、限定的にしか認識していない。
3-4	十分な批判的研究が行われており、生徒が進める芸術の実践や制作意図への影響についての認識が見られる。
5-6	踏み込んだ批判的研究が行われており、これにより生徒が進める実践や制作意図に与えた影響について確かで洞察に富んだ認識をもっていることが明確に伝わってくる。

C. アイデアおよび制作意図の伝達（視覚形式および記述形式の両方で）

作品制作形式の表から必要な数の形式を選んで活用し、生徒がどの程度まで以下の内容を示しているかを見ます。

- ・ 生徒の最初のアイデアと制作意図がどのように形成され、展開されたかを明確に説明できているか。また作品をさらに発展させるために技術的技能、選んだ表現手段やアイデアをどのように取り込んだかについて、明確に説明できているか。

得点	レベルの説明
0	成果物が下記のいずれのレベルにも達していない
1-2	最初のアイデアまたは制作意図がどのように形成され、展開したかを示している。ただし技術的技能、表現手段またはアイデアが生徒の作品にどのように貢献したかはほとんど伝えていない。
3-4	最初のアイデアおよび制作意図がどのように形成され、展開したかを示そうとしているが、十分深められていない。技術的技能、表現手段およびアイデアがどのように取り込まれたかを伝えているが、さらに踏み込める余地がある。
5-6	最初のアイデアおよび制作意図がどのように形成され、展開したかを明確に示している。技術的技能、表現手段およびアイデアがどのように取り込まれ、作品をさらに進歩させたかを効果的に伝えている。

D. 吟味、改善および振り返り（視覚形式および記述的形式の両方で）

以下の点を成果物がどの程度示しているかを見ます。

- ・ 選択したアイデア、技能、制作過程および技法の吟味、改良と、芸術家としての技能習得とその発展について振り返りができているか。

得点	レベルの説明
0	成果物が下記のいずれのレベルにも達していない
1-2	アイデア、技能、制作過程または技法の吟味や改良の過程について、ほとんど理解が見られない。振り返りの大部分が説明的であるか表面的である。
3-4	アイデア、技能、制作過程および技法の吟味とその改良の過程が見られるが、不十分である。芸術家としての技能の習得について振り返りをしているが、さらに踏み込んだ振り返りができる余地がある。
5-6	アイデア、技能、制作過程および技法の吟味とその改良の過程が、非常に効果的かつ一貫している。技能の習得と芸術家としての自身の進歩について有意で確実な振り返りをしているのがわかる。

E. 発表と科目特有の言語

以下の点を成果物がどの程度示しているかを見ます。

- ・ 一貫して適切な科目特有の言語を援用し、視覚的に適切かつ読みやすい方法で、明確かつ理路整然と情報を伝えるよう努めているか。

得点	レベルの説明
0	成果物が下記のいずれのレベルにも達していない
1 - 2	明確で視覚的にも適切な方法で情報を伝えようとしているが、その試みは一貫しておらずまた常に適切というわけではない。科目特有の言語を用いようとしているが、その試みが稀にしか見られない、または使い方が不正確である。
3 - 4	明確かつ理路整然と情報を伝達しており、視覚的にも適切で、読みやすく興味を引く内容となっている。全体を通して科目特有の言語を正確かつ適切に使用している。

内部評価

評価の目的

内部評価は、美術コースでは不可欠な要素であり、S LとH L両方の生徒にとって必須です。

指導と「生徒本人が取り組んだものであること」の認証

S LとH L両方において、内部評価課題は生徒本人が取り組んだものであることが必須です。しかし、これは、生徒自身がタイトルやトピックを決め、教師からの支援を一切受けずに、独自に内部評価課題に取り組まなければならないということではありません。教師は、生徒が内部評価課題を計画する段階と取り組む段階で重要な役割を果たします。教師は、責任をもって、以下の項目を生徒にしっかりと理解させるようにしてください。

- ・ 内部評価の対象となる課題についての要件
- ・ 評価規準 — 評価課題を通じて、生徒は与えられた評価規準に効果的に取り組むべきであること

教師と生徒は内部評価課題について話し合わなければなりません。生徒がアドバイスや情報を得るために率先して教師と話し合うよう促してください。また、生徒が指導を求めたことで減点してはなりません。教師は学習過程の一部として、学習成果物の草稿を一度読んで、生徒に助言を与えるべきです。教師は、改善する方法を口答または文書で助言することはできますが、草稿を編集してはなりません。その次に教師に渡される版が、提出用の最終版となります。

生徒全員が学問的誠実性に関する概念、特に学習成果物が本当に生徒本人が取り組んだものであること、および知的所有権についての基本的な意味と重要性を理解していることを確認するのは教師の責任です。教師は必ず、すべての評価課題が要件に沿って取り組まれていることを確認しなければなりません。また、内部評価課題が完全に生徒自身によるものでなければならないことを生徒に対して明確に説明しなければなりません。生徒間の協働が認められている場合、すべての生徒に対して協働と共謀の違いを周知徹底させる必要があります。

モデレーションや評価のためにI Bに提出されるすべての学習成果物は教師により認証されたものでなければなりません。また学問的不正行為の疑いがあるものや、不正行為が確認されたいかなる成果物も提出してはなりません。各生徒は、その学習成果物が生徒本人が取り組んだものであること、そして最終版であることを確認しなければなりません。生徒はひとたび正式に最終版の学習成果物を提出すれば、それを取り消すことはできません。

ん。学習成果物が生徒本人が取り組んだものであることの確認要件は、モデレーション目的でIBに提出されるサンプル作品だけでなく、すべての生徒の作品に適用されます。

生徒本人が取り組んだものであるかどうかは、生徒と課題の内容について議論することと、次のいずれか（または2項目以上）を精査することを通じて確認します。

- ・ 生徒の最初の提案
- ・ 学習成果物のスタイルを、その生徒が制作した作品のスタイルと比較する
- ・ 最終的な提出物を最初の学習成果物の草稿と比較する
- ・ 生徒が引用した参考資料と出典元を確認する
- ・ 第三者の立ち会いの下で生徒と面談する
- ・ www.turnitin.com などのウェブ上の剽窃検出サービスを使用して学習成果物を分析する

学問的誠実性、特に生徒本人が取り組んだものであることや知的所有権に関する概念の基本的な意味と重要性について、すべての志願者に周知徹底させるのは指導教員の責任です。指導教員は、すべての生徒の評価用の学習成果物が要件にしたがい準備されるよう万全を期し、また志願者に対して評価用に提出されるあらゆる学習成果物が本人によって制作したものなければならないことを明確に説明しなければなりません。

教科における評価課題と課題論文（EE）に同じ成果物を提出することはできません。

この問題についてのさらに詳しい案内と真正さの確認手順については、IB資料『学問的誠実性』、『一般規則：ディプロマプログラム』および『DP手順ハンドブック』の関連項目を参照してください。

時間配分

内部評価は、美術コースの不可欠な要素であり、SLおよびHLのコースでは最終評価の40%に相当します。この配点比率を踏まえて、課題に取り組むのに必要な知識、スキル、理解の指導にあてる時間、および課題を進めるために必要な時間を配分する必要があります。このセクションは以下の要素によって構成されます。

- ・ 教師が生徒に内部評価の要件を説明する時間
- ・ 授業中に生徒が内部評価の構成要素に取り組み、質問をする時間
- ・ 教師と各生徒が話し合う時間
- ・ 課題に目を通し、進行状況を確認する時間、および生徒本人が取り組んだ課題であるかどうかをチェックする時間

要件および奨励事項

モデレーション（評価の適正化）を厳格に行うため、モデレーターは、教師が内部評価を実施した際に使用したものと同一証拠エビデンスに基づき、モデレーションを行う必要があります。

したがって、作品発表課題用に選ばれた作品と補助資料の評価は、提出された成果物のデジタル形式、つまり画像ファイルの形式で行わなければなりません。

内部評価への評価規準の適用

内部評価には、多くの評価規準が設けられています。各評価規準には、学習成果物が特定のレベルに到達している場合にその成果物に見られる特徴を記述した「レベルの説明」と、それに対応する点数が明示されています。「レベルの説明」では、基本的に学習の成果として捉えられる肯定的な側面を判断基準として取り上げています。ただし、下位の到達レベルでは、達成できなかった点を判断基準としている場合もあります。

教師がSLおよびHLの内部評価課題を採点する際は、評価規準の「レベルの説明」に照らし合わせて判断しなければなりません。

- ・ SLおよびHLの生徒については同じ評価規準が適用されますが、HLではさらに規準が追加されます。
- ・ ベストフィット（適合）モデルの考え方にに基づき、「レベルの説明」から、生徒の到達レベルを最も適切に示す説明を見つけます。学習成果物に見られる到達度が規準に示されている要素によって異なる場合、補正するというのがベストフィット（適合）アプローチの考え方です。与えられる点数は、規準に照らし合わせた場合に、到達レベルのバランスを最も公正に反映するものでなければなりません。「レベルの説明」に挙げられている要素をすべて満たさなければ、その点数が得られないということではありません。
- ・ 生徒の学習成果物を評価する際、教師は、評価規準で学習成果物のレベルを最も的確に示している説明と一致するまで、各レベルの説明を読まなければなりません。学習成果物が2つの説明のちょうど中間にあたると見られる場合、両方の説明を読み直し、生徒の学習成果物をより適切に示す方を選ばなければなりません。
- ・ 1つのレベルに2つ以上の評点が相当する場合、生徒の学習成果物が十分に高品質であることを示していれば、その成果物は1つ上のレベルに近いと考えられるため、教師は高い方の評点を与えるようにしてください。逆に生徒の学習成果物が低い品質を示していれば、その成果物は1つ下のレベルに近いと考えられるため、教師は低い方の評点を与えるようにしてください。
- ・ 整数のみを用います。分数や小数を用いた点は認められません。
- ・ 教師は合格・不合格の線引きをするような考え方をせずに、各評価規準において、学習成果物を最も適切に表すレベルを判別することに専念しなければなりません。
- ・ 「レベルの説明」にある最上位レベルは、欠点のない完璧な学習成果を意味するものではありません。基準は、生徒が最上位レベルに達することができるように設定されています。その学習成果物が最上位レベルの説明内容にあてはまるのであれば、教師は最高点をつけることを躊躇してはなりません（最低点についても同様です）。

- ・ 1つの規準において到達レベルの高かった生徒が、他の規準においても到達レベルが高いとは限りません。同様に、1つの規準において到達レベルの低かった生徒が、他の規準においても到達レベルが低いとは限りません。教師は、生徒の全体的な評価からある特定の点数をその生徒の得点として想定するべきではありません。
- ・ 生徒が評価規準を参照できるようにしておくことが強く奨励されています。

内部評価の詳細 — 標準レベル（S L）と上級レベル（H L）

パート3：作品発表

配点比率：40%

S LおよびH Lの生徒は完成作品を選んで作品発表のために提出しなければなりません。選択した作品は、美術コース期間において生徒が達成した技法の証拠^{エビデンス}となり、自身の制作意図を実現するため素材やアイデア、実践を活用することについての理解を示すものであるべきです。生徒はまた、受け手に向けてキュレーター・ステートメントの形で、この関連性が高くまとまった多数の作品を選んだときに行った意思決定の過程を明らかにします。

コース中、生徒は多様な表現手段を用いた自身独自の作品制作に必要な技能と技法を習得します。本評価の構成要素における評価の準備のために、生徒は課題要件に最適な必要数の作品を選び、最も高い成果を示します。S Lの生徒は4－7作品を選択して提出し、H Lの生徒は8－11作品を選択して提出します。

学習成果物の最終発表は、発表全体（付随するテキストを含む）を見て教師が課題評価規準に照らして評価します。

準備の過程

コアシラバスにおける本課題の準備のために、S LとH Lの生徒は以下の経験が必要です。

	文脈に沿った美術	美術の方法	美術のコミュニケーション
キュレーションの実践	生徒が見て体験した作品や展覧会に対する知識に基づいた鑑賞眼を培う。 生徒は作品を制作し作品発表する際の自身の意図を説明できるようにする。	生徒の進行中の作品がどのような意味と目的を伝えるかを評価する。 「展覧会」の本質について考察し、選択の過程と自身の作品が異なる受け手に与える潜在的な影響について考える。	作品発表用に完成作品を選択し、発表する。 複数の作品が互いにどのようにつながっているかを説明する。 芸術的判断が発表全体にどのように影響するかについて議論する。
美術ジャーナル	体験したことや学習したことを、印象、振り返りおよび関連するすべての研究と共に美術ジャーナルに記録する。		

生徒はその後、以下の評価のための過程に進みます。

課題の詳細

S LおよびH Lの生徒は作品発表課題のために、以下のことを最もよく示すような独自の完成作品を選び発表します。

- ・ 技法の習熟
- ・ 素材、技法、制作過程の適切な活用
- ・ 表明した作品の制作意図を伝える解決策
- ・ 統一性
- ・ 幅と深さ
- ・ 受け手の全体的な体験に対する配慮（展覧会、展示または発表を通して）

生徒は技法の達成や、作品概念の強さ、表明した制作意図をどれだけ実現しているかに基づいて評価されます。S LおよびH Lの生徒は、自身が選択した完成作品の補助資料として以下のものも提出してください。

- ・ 選択した作品それぞれについて、作品タイトル、表現手段、サイズおよび最初の制作意図を簡単に述べたキャプション
- ・ 自身の作品発表全体を写した写真2枚。この写真が個々の作品の評価に使われることはありませんが、作品発表における受け手の総合的な体験を生徒がどのように考慮したか、モデレーターが推測する手がかりとなることがあります。作品写真には評価用に選択され提出される作品だけが写っているようにしてください。

S Lの生徒は制作した作品に付随するキュレーター・ステートメントも記してください（最大400語（日本語は800字））。キュレーター・ステートメントでは、生徒の意図の説明に加えて、キュレーションの方法論を踏まえて作品の発表についてどのように考慮したかを説明します。

H Lの生徒もまた、制作した作品に付随するキュレーター・ステートメントを記してください（最大700語（日本語は1400字））。キュレーター・ステートメントでは、生徒の意図の説明を行います。加えて、キュレーションの方法論を踏まえ、作品と受け手の潜在的な関係性についても考察したうえで、作品の発表についてどのように考慮したかを説明します。

評価課題における美術ジャーナルの活用

すべての生徒は、自身の作品の制作意図を記録し、またそれを実現する過程を振り返るために美術ジャーナルを活用する必要があります。生徒は、キュレーター・ステートメントのために提出された資料の下地として、自身のジャーナルに記録した内容を用い、ここから選択、調整して発表します。生徒はまた、自身の美術ジャーナルを使用して作品発表を計画し、利用可能な空間の見取り図を使用して、どこにどの芸術作品を陳列するかを決めることもできます。鑑賞者がどこから入ってくるかを考慮して作品の配置を決めることもあります。作品発表において作品と作品の配置の間どのような関係を構築する必要があるのかを考慮し、加えて作品発表環境や作品の見られ方を左右する可能性のある要素を考慮します。



作品発表の構成

作品発表用に制作される作品は、パート1「比較研究」およびパート2「プロセスポートフォリオ」における最初の研究やそこから深化した研究と内容が重なるか、それらの研究を発展させたものが望ましいです。

教師指導の学習活動および生徒による自主研究の両方を通じて、作品発表用の作品制作は慎重かつ円滑に進められます。生徒は本課題の準備のために、多様な技能、技法および制作過程に取り組みます。それにより素材や表現手段、技法や制作過程の処理ができるようになり、自身の長所を見つけ、技法的に優れた作品を制作することができます。

作品制作の形式

S LおよびHLの生徒は、パート2「プロセスポートフォリオ」のために一連の作品制作の形式に取り組んだ後で、パート3「作品発表」用にいずれかの作品制作の形式で制作した作品を提出することができます。提出される作品は、生徒が自身の全完成作品の中から選んだものとし、また評価規準に照らして最も達成度が高いものでなければなりません。これらの作品は受け手にふさわしい方法で発表します。

キャプション（1つの作品につき最大アルファベット 500 字、日本語 200 字）

提出される各作品には、それぞれ作品タイトル、表現手段およびサイズを簡単に記したキャプションを添付する必要があります。キャプションには作品の最初の制作意図についての概略を含めてください（1つの作品につき最大アルファベット 500 字、日本語 200 字）。キャプションには、各作品に影響を与えたあらゆる資料の出典を入れる必要があります。また該当する場合は、オブジェが自身で制作したものか、見つけてきたものか、購入したものをキャプションの「表現技法」セクションに記入してください。生徒が自身の

作品の制作意図にきちんと基づいて、他の芸術家のイメージを意図的に「流用」している場合、キャプションに元のイメージの出典を明記する必要があります。

集合作品

生徒は評価のために個別の作品を提出しなければなりません。ただし、一部の作品を1つの集合作品の形式で提出したい場合（2部作、3部作、複数組作品やシリーズ作品など）、そのことを当該作品のキャプションの作品タイトルに括弧書きで明記する必要があります。例: 作品タイトル（2部作）。集合作品を記録して提出するための要件は、他の標準的な作品の提出の場合と同じです。ただし集合作品を提出する生徒は、サイズ面で不利な点があることも理解しておいてください。集合作品として提出される1枚の画像では試験官が見ることのできない詳細は考慮されない可能性があります。適切なキャプションが添えられていない集合作品は個別の作品とみなされ、最大作品数を超えるものと判断されることがあります。

学問的誠実性

評価のために提出される作品は、生徒により制作されたものでなければなりません。たとえば、ファッションデザインの作品は、生徒自身で制作した場合を除き、評価のために実物の形で提出することはできません。生徒が作品を自身で形にしていない場合でも、作品発表での評価のために当該作品のデザインを作品として提出することは可能です。ただし実物化された作品をそこに入れることはできません。生徒が既製品や、見出された対象を用いて作品を制作した場合は、その作品は生徒が制作したものとみなされます。生徒はオブジェが自身で制作したものか、見つけてきたものか、または購入したかものかを、キャプションの編集時に「表現技法」セクションに明記しなければなりません。生徒が展示用に選んだ作品が他者の作品、アイデアまたはイメージに影響を受けたという認識がある場合、学校が選択した引用形式の規則にしたがいキャプションにその出典を明記する必要があります。



教師の役割

上述のコアシラバス活動を入念に計画し実施することにより、生徒が本課題の要求に対して適切な準備を整えられるよう、教師は徹底しなければなりません。本評価課題は教師主導であってはならず、生徒は自身の作品が判定される際の評価規準を完全に把握する必要があります。

生徒が評価課題に取り組んでいるとき、教師は各生徒と提出用の作品の選択について話し合ってください。ただし選択された作品は生徒自身が選んだものであることが重要です。

教師は補助資料の草稿を一度読んで生徒に助言を与えるべきです。教師は補助資料を改善する方法を口答または文書で助言することはできますが、草稿を編集してはなりません。その次に教師に渡される版が、提出用の最終版となります。また、生徒が提出用の各作品についてキャプションを正しく制作し提出するよう、教師は徹底してください。

キュレーター・ステートメントの構成

キュレーター・ステートメントでは、SLおよびHLの生徒は、なぜ特定の作品が選ばれ特定の形式で発表されたのかを説明しなければなりません。これは生徒が、作品の選択や発表を左右した難題についてや、克服したこと、革新的な手法、課題などについて説明する良い機会です。作品が受け手に関連づけられるように、生徒はキュレーター・ステートメントを活用して特定の作品を制作し発表した文脈を説明する必要があります。さらにHLの生徒は、作品の配置と見せ方が、展示作品の意味や制作意図に対する受け手の解釈、または理解にどのように影響するかについても説明しなければなりません。

SLの生徒には本課題に取り組むときに以下の問いが役に立つはずですが、これはあくまで説明のためのもので規定や規制を意図するものではありません。

- ・ この一連の作品を発表することで何を達成しようとしているのか。この一連の作品は受け手にどのような影響を与えるか。最初に伝えようとしていた作品概念と理解はどんなものか。
- ・ 特定の課題やモチーフ、アイデアはどのように探究され、また特定の素材や技能はどのように活用されたか。
- ・ 作品に見られるテーマは何か、また作品はどのような体験に影響を受けたか。
- ・ 作品の展示方法は、受け手に伝えようとしていた意味にどのような影響を与えたか。

HLの生徒には本課題に取り組むときに以下の問いが役に立つはずですが、これはあくまで説明のためのもので、規定や規制を意図するものではありません。

- ・ この一連の作品を発表するためのビジョンはどのようなものか。
- ・ 特定の課題やモチーフ、アイデアはどのように探究され、また特定の素材や技能はどのように活用されたか。
- ・ 作品に見られるテーマは何か、また作品はどのような体験に影響を受けたか。
- ・ 作品の展示方法は、受け手に伝えようとしていた意味にどのような影響を与えたか。
- ・ 作品と受け手の間の関係性を築くためにどのような戦略を用いたか（たとえば見た目のインパクトなど）。
- ・ 作品の配置や見せ方によって展示された作品相互の関係性やつながりはどのように支えられているのか。
- ・ 作品発表に選んだ作品から、受け手が何を感じ、思い、体験し、理解し、見て、学習し、考えることを意図したのか。

課題の形式的な要件－S L

- ・ S Lの生徒は400語以内のキュレーター・ステートメントを提出する。
- ・ S Lの生徒は4－7作品を提出する。
- ・ S Lの生徒は選択した各作品についてキャプション（作品タイトル、表現技法、サイズおよび制作意図を記入したもの）を提出する。

S Lの生徒は自身の作品発表の様子全体を写した写真2枚を提出してもかまいません。2枚の写真自体は評価の対象ではなく、個々の芸術作品の評価にも使用されません。

課題の形式的な要件－H L

- ・ H Lの生徒は700語以内のキュレーター・ステートメントを提出する。
- ・ H Lの生徒は8－11作品を提出する。
- ・ H Lの生徒は選択した各作品についてキャプション（作品タイトル、表現技法、サイズおよび制作意図を記入したもの）を提出する。

H Lの生徒は自身の作品発表の様子全体を写した写真2枚を提出してもかまいません。2枚の写真自体は評価の対象ではなく、個々の芸術作品の評価にも使用されません。

評価課題の提出

生徒は、作品の特性および利用可能なリソースに応じて、評価用の各作品を多様な方法で記録し提出してかまいません。作品は、選択した作品制作の形式に最適な何らかの電子メディアによって記録するのが理想的です。たとえば、2次元の作品は静止画像で、また3次元の作品は短時間のビデオ録画が最適でしょう。ただし、アニメーションなどのカメラやビデオ、電子機器、画像ファイルを使用した作品では、独自のファイル形式を要求されることがあります。このようなタイム・ベース作品を提出する場合、制限時間は最大5分なので注意してください。評価資料の記録のために使用可能なファイル形式については、『D P手順ハンドブック』を参照してください。

追加の補助写真

それぞれの作品の記録方法がどのようなものであっても、生徒は提出する各作品について最大2枚の写真を追加することができます。これらの補助写真やスクリーンショットの追加は、生徒が提出する作品のスケール感を出したり、細部を明確に伝えたりすることを目的としています。これらの写真の追加は任意です。平面作品の写真は、マウントや額のない状態で撮影してください。補助写真の提出方法および受け付け可能なファイル形式の詳細については、I B資料『D P手順ハンドブック』を参照してください。



不可能でない限り、学校にはそれぞれの生徒の作品発表の様子全体を写した写真2枚を提出することが奨励されています。この展示写真は、展示風景、および作品のサイズと範囲の理解を促すものです。この写真が個々の作品の評価に使われることはありませんが、作品発表における受け手の総合的な体験を生徒がどのように考慮したか、モデレーターが推測する手がかりとなることがあります。作品発表写真には評価用に選択され提出される作品だけが写っているようにしてください。

評価用の作品を提出する手順については、IB資料『DP手順ハンドブック』を参照してください。生徒は提出する作品数を示すようにしてください。提出された資料の数が規定された制限を超えている場合、試験官は制限内の資料のみに基づいて評価を行うことになっています。

内部評価規準—SLおよびHL

まとめ

パート3：作品発表		SL 評点	SL 合計点	HL 評点	HL 合計点
A	一貫性のある一連の作品	9	30	9	30
B	技法の習熟	9		9	
C	作品概念の質	9		9	
D	キュレーションの実践	3		3	

規準

A. 一貫性のある一連の作品

エビデンス
証拠：キュレーター・ステートメント、提出作品、キャプションおよび作品発表の様子の写真／ビデオ

以下の点を成果物がどの程度示しているかを見ます。

- ・ 一貫性のある一連の作品が表明された制作意図を実現しており、またそれぞれの作品間にテーマの関連性や様式の関連性が明確に見て取れるか

提出した作品数が最低限に満たない志願者には、6を超える評点は与えられません。

得点	レベルの説明
0	成果物が下記のいずれのレベルにも達していない
1 - 3	それぞれの作品間にテーマの関連性や様式の関連性が最小限しか見て取れず、一貫性がほとんど見られない。表現手段、制作過程および技法の選択と応用、またイメージの活用から制作意図に対する考慮が最小限しか見られない。
4 - 6	それぞれの作品間にテーマの関連性や様式の関連性がまずまず見られ、ある程度の一貫性が見られる。表現手段、制作過程および技法の選択と応用、またよく考えられたイメージの活用により、表明された制作意図がそこそこ実現されている。
7 - 9	それぞれの作品間にあるテーマの関連性や様式の関連性が効果的に伝わっており、一連の作品に一貫性が見られる。表現手段、制作過程および技法の選択と応用、またよく考えられたイメージの活用により、表明された意図が効果的に実現されている。

B. 技法の習熟

エビデンス

証拠：キュレーター・ステートメント、提出作品、キャプションおよび作品発表の様子の写真／ビデオ

以下の点を成果物がどの程度示しているかを見ます。

- ・ 表現手段と素材が効果的に適用され修正されているか
- ・ 形式的特性が効果的に適用され修正されているか

提出した作品数が最低限に満たない志願者には、6を超える評点は与えられません。

得点	レベルの説明
0	成果物が下記のいずれのレベルにも達していない
1 - 3	表現手段と素材の最低限の適用と修正しか見られず、選択した形式における最低レベルの技法の習熟度にしか達していない。また最低限の形式的特性の適用と修正しか見られない。
4 - 6	表現手段と素材の十分な適用と修正が見られ、選択した形式における技法の習熟度は許容レベルに達している。また形式的特性の効果的な適用、修正が見られる。
7 - 9	表現手段と素材の効果的な適用と修正が見られ、選択した形式における技法の習熟度は確かなレベルに達している。また形式的特性の効果的な適用、修正が見られる。

C. 作品概念の質

エビデンス
証拠：キュレーター・ステートメント、提出作品、キャプションおよび作品発表の様子の写真／ビデオ

以下の点を成果物がどの程度示しているかを見ます。

- ・ 表明された制作意図に沿って芸術作品の機能、意味および目的を実現するために、イメージや記号、象徴が効果的に決められているか

提出した作品数が最低限に満たない志願者には、6を超える評点は与えられません。

得点	レベルの説明
0	成果物が下記のいずれのレベルにも達していない
1-3	アイデアやテーマ、作品概念が最低限しか練られておらず、イメージ、記号または象徴が最低限しか用いられてないか、活用されていても露骨であったり、不自然であったり、表面的である。芸術的意図は最低限しか伝わっていない。
4-6	アイデアやテーマ、作品概念が適度の実現される程度に見た目が練られており、イメージや記号や象徴を用いて表明された芸術的意図を十分に伝えているのがわかる。
7-9	アイデアやテーマ、作品概念が効果的に実現されるまで見た目が練られており、複雑なイメージや記号や象徴が巧みに用いられ、表明された芸術的意図を効果的に伝えているのがわかる。

D. キュレーションの実践（SLのみ）

エビデンス
証拠：キュレーター・ステートメント、提出作品、キャプションおよび作品発表の様子の写真／ビデオ

以下の点をキュレーター・ステートメントがどの程度正当化しているかを見ます。

- ・ 指定された空間における一連の作品の選び方、配置の仕方、また作品発表の仕方

得点	レベルの説明
0	成果物が下記のいずれのレベルにも達していない
1	キュレーター・ステートメントが展示された作品の選択と配置を部分的にしか正当化していないか、キュレーター・ステートメントが展示を正確に表していない。
2	キュレーター・ステートメントが展示された作品の選択と配置の大部分を正当化している。また与えられた空間内に、表明された生徒の制作意図に沿って作品が展示、配置されている。
3	キュレーター・ステートメントは展示された作品の選択と配置を完全に正当化している。また与えられた空間内に、表明された生徒の制作意図にしたがい明確でふさわしい方法で作品が展示、配置されている。

D. キュレーションの実践（HLのみ）

エビデンス
証拠：キュレーター・ステートメント、提出作品、キャプションおよび作品発表の様子の写真／ビデオ

以下の点をキュレーター・ステートメントがどの程度示しているかを見ます。

- ・ 指定された空間における一連の作品の選び方、配置の仕方、また作品発表の仕方を正当化できているか
- ・ 展示からどのように作品と受け手の間の関係性が理解できるかについての振り返りを行っているか

得点	レベルの説明
0	成果物が下記のいずれのレベルにも達していない
1	<ul style="list-style-type: none"> ・ キュレーター・ステートメントが展示された作品の選択と配置を部分的にしか正当化していないか、キュレーター・ステートメントが展示を正確に表していない。 ・ キュレーター・ステートメントは生徒に与えられた空間内での作品と受け手の間の関係性の正当化をほとんど伝えていない。
2	<ul style="list-style-type: none"> ・ キュレーター・ステートメントが展示された作品の選択と配置の大部分を正当化している。 ・ キュレーター・ステートメントは生徒に与えられた空間内での作品と受け手の間の関係性を大部分で明確に示している。
3	<ul style="list-style-type: none"> ・ キュレーター・ステートメントは、展示された作品の選択と配置を完全に正当化している。 ・ キュレーター・ステートメントは生徒に与えられた空間内での作品と受け手の間の関係性を効果的に明示している。

指示用語の解説

美術の指示用語

生徒は、試験問題で使用される次の重要な指示用語および表現に慣れておく必要があります。指示用語は以下の定義に基づいて、理解されなければなりません。これらの用語は試験問題に頻出しますが、それ以外の用語を用いて、生徒に特定の方法で議論を展開するよう指示する場合があります。

指示用語	評価目標 レベル	意味
分析しなさい Analyse	AO 2	本質的な要素または構造を明らかにするために分解しなさい。
応用しなさい Apply	AO 2	与えられた問題または課題との関連において、考え、公式、原理、理論、または法則を用いなさい。
比較・対比しなさい Compare and contrast	AO 3	2つ（またはそれ以上）の事柄または状況の類似点および相違点について、常に双方（またはすべて）について言及しながら、説明しなさい。
対比しなさい Contrast	AO 3	語句、概念、または物理量の正確な意味を述べなさい。
示しなさい Demonstrate	AO 2	具体例や実際の適用例を挙げ、根拠や証拠 ^{エビデンス} を用いて明らかにしなさい。
詳しく述べなさい Describe	AO 1	詳細に述べなさい。
論じなさい Discuss	AO 3	さまざまな議論、要因、仮説を考慮し、バランスよく批評しなさい。意見または結論は、適切な根拠を挙げて、はっきりと述べなさい。
評価しなさい Evaluate	AO 3	長所と短所を比較し、価値を定めなさい。
考察しなさい Examine	AO 3	論点の前提や相互関係が明らかになるように、議論または概念について考えなさい。

指示用語	評価目標 レベル	意味
説明しなさい Explain	AO 2	理由や要因などを詳しく述べなさい。
探究しなさい Explore	AO 2	何かを発見するための系統立ったプロセスに取り組みなさい。
特定しなさい Identify	AO 1	数ある可能性の中から答えを確定させなさい。
正当化しなさい Justify	AO 3	答えや結論を裏づける妥当な理由や根拠を述べなさい。
列挙しなさい List	AO 4	説明をつけ加えずに、簡潔な答えを並べなさい。
簡単に述べなさい Outline	AO 1	簡潔な説明または要点を述べなさい。
発表しなさい Present	AO 1	展示、観察、考察または熟慮のために提供しなさい。
示しなさい Show	AO 4	計算や微分を示しなさい。
どの程度 To what extent	AO 3	議論または概念の長所または短所を検討しなさい。意見および結論ははっきりと提示し、適切な証拠 ^{エビデンス} および論理的に正しい論拠をもたせなさい。